

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## マダガスカルの民族移動と言語形成： 民俗語彙・植物名称の意味的変遷から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Austronesian   Barito isolects   Javanicism   Sanscrit   Swahili 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004256">https://doi.org/10.15021/00004256</a>

マダガスカルの民族移動と言語形成  
——民俗語彙・植物名称の意味的変遷から——

崎 山 理\*

Migrations to Madagascar and Formation of the Language of Madagascar:  
A Comparative Study on the Folk-Vocabularies and Plant Names

Osamu SAKIYAMA

This paper emphasizes that the present languages of Madagascar (the national language “Malagasy” is based on the Merina dialect) have been formed through the process of the pidginization of Javanese. Javanese was the language of the latest immigrants, who navigated from Indonesia about A. D. 1400 and conquered most of Madagascar founding the Merina Kingdom. As a lingua franca Javanese spread throughout the country and got creolized with the language of the antecedent occupants of Madagascar, who were composed of the coexistent peoples, including the preceding Indonesians, Africans, and Arabs.

The initial Austronesian settlement might have been, as O. C. Dahl supposed, underway by about A. D. 400 among the Barito peoples in South Kalimantan under the reign of the Indianized Kutai Kingdom at that time.

In this paper, Sakiyama suggests the appropriateness of that dating by accumulating the regional cognates, which are characteristic of the two areas, Madagascar and South Kalimantan, and by presenting the distinct Javanicisms which appeared subsequently in modern Malagasy idioms.

In particular, by basing its analysis on the comparison of the folk-vocabularies and the plant names from a standpoint of the semantic changes, this study will become a first attempt to chronologize and to

---

\* 国立民族学博物館第5研究部

**Key Words** : Austronesian, Barito isolects, Javanicism, Sanscrit, Swahili  
キーワード : オーストロネシア語族, バリト諸語, ジャワ語法, サンスクリット語,  
スワヒリ語

determine the original places of Madagascar migration and its language-formations.

The author's presentation on migrations has the following stages in this paper: 1. Pre-South Kalimantan and South Sulawesi Age, 2. Post-South Kalimantan Age, 3. East Africa Age, 4. Java and Sumatra Age.

はじめに	Ⅵ. 移民の歴史
Ⅰ. マダガスカルとインドネシアの文化の類似性	——稲作の開始と牧畜の導入——
Ⅱ. オーストロネシア語族におけるマダガスカルの言語の位置	第1期 南部カリマンタン (スラウェシ) 前期
Ⅲ. メリナ語とカリマンタンの諸言語との関係	第2期 南部カリマンタン後期
Ⅳ. サンスクリット語借用語 ——とくに暦法の導入——	第3期 東アフリカ期
Ⅴ. マダガスカル移民の新環境への適応	第4期 ジャワ (スマトラ) 期
	Ⅶ. 植物名称の維持と変遷
	Ⅷ. マダガスカル語の形成
	1. 語彙, 2. 文法 (接辞法)
	おわりに

## はじめに

マダガスカルがインドネシア、フィリピン、台湾、ミクロネシアのマリアナ、ペラウなどととも、オーストロネシア語族のインドネシア語派民族文化圏に属することは、言語の系統関係から疑い得ない事実であるが、文化要素の面からも、彼らの故里に起源をもつものが現在のマダガスカルにおいて確実に、しかし断片的に、維持、継承されている。

本論は、Ⅰ章からⅥ章まで、インドネシアからマダガスカルへの民族移動のクロノロジーを、主としてオーストロネシア語族の民俗語彙の継承と意味変化に基づいて時代画定を試み、とくにⅦ章では、オーストロネシア語系の植物名称についてその維持と意味の変遷を比較民族植物学的に研究する。ただしここでいう比較とは、あくまでもオーストロネシア民族誌の枠内でのことであって、二つの地域のすべての植物に関する知識の全体の比較という性格のものではない。最後にⅧ章では、オーストロネシア語史のなかにおいてマダガスカルの言語が、重層的な語彙の特徴に加え、文法的特徴からみて、どのように形成されたかについて一応の結論を与える。

## I. マダガスカルとインドネシアの文化の類似性

中央高地で灌漑稲作をおもな生業とするメリナ族の場合、伝統的な民家の形式はジャワ的特徴をみせるが、二次葬祭をともなる埋葬儀礼 *famadihana* はスラウェシ島のトラジャ族、カリマンタン島のダヤク諸族やマアニャン族にみられるものであり、また呪物崇拜はダヤク諸族の習慣とむしろ共通する。ただし呪物崇拜については、ジャワの古い習慣の名残りであることも考えられる。また天・土・水の合体による神聖結婚のモチーフが、カリマンタンの『バンジャル史』(*Hikayat Banjar*)と『イメリナ王国史』(*Tantara ny Andriana*)にみとめられる [OTTINO 1986: 70]。

いっぽう、ソガジュダヤク族の台上葬の名残りは、ベツィミサラカ族やタナラ族の一次墓にみとめることができるが、ダヤク諸族が悪霊よけのため家屋の近くに立てる祖先像 (*hampatong*) と類似した像は、サカラヴァ族の墓にみられる。しかしサカラヴァ族 (南部のメナベ王国) の、王の宝器を定期的に川で水浴させる大祭 *fitampuha* は、スラウェシ島のブギス族のマウルド祭 (*Maulud*) という模範的 (*exemplaire*) 農耕開始儀礼に類似することが指摘されている [HAMONIC 1987: 211]。

マダガスカルの各民族が、故里のどの民族の後裔になるかということ、を確定するのは困難である。もちろん、もともになった現代のインドネシアやフィリピンの民族文化そのものが、それぞれの民族の過去の文化を完全な形で継承しているとは考えられないこと、またマダガスカルの各民族文化も、故里の文化要素のなかから選択したものを保持し再編成して、あらたな文化複合を形成しているからである。そのうえ、マダガスカルにおける民族集団の興亡も、史実としては十分に明らかでないことが、民族の出自の研究を困難にする。

インドネシア方面からマダガスカルへいつ民族移動が行われたのかについて、確実にそれを証明する歴史的資料は、現在までのところ見出されていない。8世紀から9世紀頃にアフリカ東岸あるいはその付近となんらかの交渉があった証拠として、古ジャワ語にみられるペルシア語起源の *jēnggi* 「奴隸」 [ZOETMULDER 1982] という語の存在、そして *jēnggi* は中国資料の『諸蕃志』(巻上・海上雑国) に記された崑崙層期国の層期に比定されるという説 [DAHL 1951: 366-367]、アラブ人による *Waq-waq* という諸島名の語源がビョウタコノキのマダガスカル名 *vakoa* (Ⅶ章12参照) にあるとする説などがある [FERRAND 1904]。しかし、いずれもアフリカ東岸付近一帯の漠然とした地域からの情報であって、確実にそれがマダガスカルであったという決定的

根拠を欠いている。そもそもその当時、マダガスカルがどう呼ばれていたのかが不明なうえに、断片的な語彙による推測にはおのずと限界がある。

インドネシアからの移動ルートにしても、インド南岸からアフリカ東岸経由説、直行説のいずれかも、まだ確定されるにはいたっていない。しかし、7～8月に南赤道海流に乗り南東貿易風をつかまえば、6千キロの距離を直行することも不可能ではないといわれる [LABATUT et RAHARINARIVONIRINA 1969: 24; 高谷他 1989: 431]。ただし、マダガスカルと同じアウトリガー付きのカヌーは、インド南部やアフリカ東海岸でも使用されており、このような分布状態には説明を要するが、長い航海よりも途中で寄港することのほうが、より多くの危険をともなったことは十分に予想し得る。

## Ⅱ. オーストロネシア語族におけるマダガスカルの言語の位置

国立民族学博物館の共同研究として行われた東南アジア、オセアニアの文化クラスターの分析結果からは、マダガスカル（そのデータは、サカラヴァ、タナラ、ツィミヘティ、アンテサカ、マハファリの各民族からとられている）は、東南アジア島嶼部の比較的発達した農耕文化にかかわる「因子5の強群」にたいする「因子5の弱群」に、インドネシアではニアス族、ミナンカバウ族、トラジャ族（東部・南部）、マカッサル族、バンガイ族、スンバ族、アル族、イバン族、カヤン族およびフィリピンのバゴボ族などとともに含まれ、東南アジア初期鉄器文化にイスラム教のような新しい要素がくわわった文化複合をしたものと解釈されている [大林他 1990: 224]。その項目には、吹き矢、奴隷制、マレー式フィゴ、樹皮布、削歯、わな、人身供犠、巨石記念物、環状割礼、イスラム、くり船、発火錐、産婦加熱、土器製造、ロングハウス、こう打法、星座暦、内臓占い、ふんどし、があるが、このうち、マダガスカルに見出されないものは、ロングハウス、こう打法、内臓占い、のみである。またイスラム教は、9世紀ごろアラブ人によってマダガスカルに伝えられたが、現在、イスラム教徒の数は10万人に満たないといわれる。

うえに示された要素のほかにも、手織機の分布では、オーストロネシア語族に特徴的な単式輪状綜統タイプ（いざり機の一型式）が、台湾、フィリピン、東部インドネシアとマダガスカルで共通し [吉本 1987: 401-403]、インドネシア語派の周辺に古い型式が残っている。楽器にも西部ジャワの竹製打楽器（*angklung*）の原型と考えられる竹製振動楽器 *kotra* や、東部インドネシア、フィリピンに残る竹筒琴と同じ型式

の楽器 *valiha* が、マダガスカルに見出される [SACHS 1938: 75-76]<sup>1)</sup> (写真1, 2)。

文化クラスターで示されたこのようなマダガスカルにおける文化的均質性は、イスラム渡来以前の、多民族が割拠した時代にまでさかのぼるものではない。しかし、現在の差異の小さい言語状態とも並行する点で注目される。現在のマダガスカルにおける諸言語相互間の相互理解度 (*mutual intelligibility*) には問題がないことが指摘されている [DYEN 1971: 211]。それは、『太平洋地域言語地図』のなかのマダガスカルに、方言的レベルでの区画しか示されていないことからわかる。[WURM and HATTORI 1981: Map 38]。マダガスカルにおいては、インドネシアのいくつかの地方の、それも時代を異にする言語、アラビア語、スワヒリ語などが混在する他民族多言語状態が長期間、継続したと考えられる。現在のような言語的に均質な状況は、17世紀から始まったイメリナ王国による国土統一の結果に起因するであろう。

現在の方言的差異は、音韻の特徴のうち、とくに顕著な対立を示す *li: di, ti: tsi* を標識に、前者を西部方言、後者を東部方言として区別されることがある [DEZ 1963:

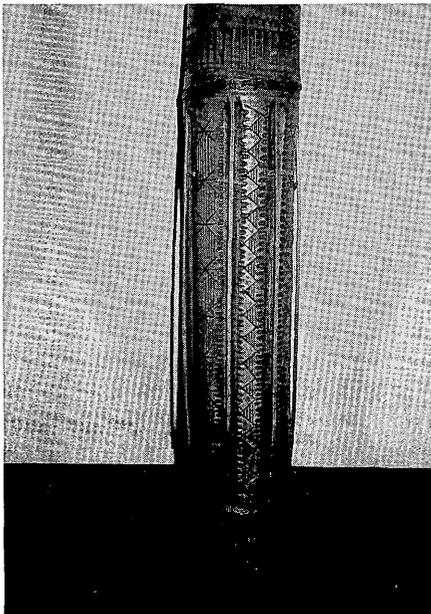


写真1 ミンダナオ島パゴボ族の竹筒琴  
(民博標本番号 H63046)



写真2 valiha を売る人 (アンタナナリヴ)

1) ただし、*valiha* の語源は不明である。サンスクリット語 *vadya*-「楽器」に求める説 [SACHS 1938: 51] は疑わしい。

589-590; GUEUNIER 1988: 148]。この現象を原オーストロネシア語からみれば, li, ti は原音を維持し古風であり, di, tsi はそれからあらたに変化した音ということになる。図1では, +--+線が li: di, ti: tsi の境界を, ---線が ti: tsi の延長域を示している。この変化は, 後に述べるように, インドネシアの南部カリマンタンにおいて発生し, そこからの移民によってマダガスカルの東部方言にもたらされた可能性がある。言語年代学に基づく計算結果では, 原マダガスカル語の段階から, 北東部のアンタンカラナ方言が他の方言から紀元前107年から紀元50年に分岐したことになるが [VERIN, KOTTAK and GORLIN 1969: 63], これは, 初期の渡来者が島の北方から定住を開始したという伝説とも一致する。ただし, 紀元前後という年代を, 文化史的に正当化するには困難がある。

Dahl による音韻, 語彙, 文法から行われた言語史的仮説は, マダガスカルの言語

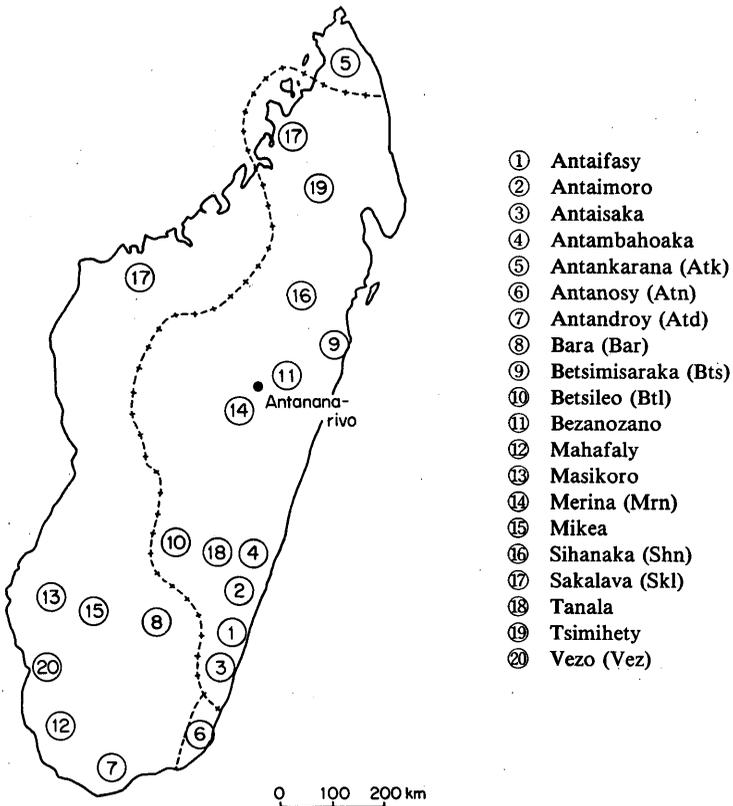


図1 マダガスカルの言語分布図  
Gueunier [1988] に基づき作図

が南部カリマンタンのマアニャン族の言語ともっとも近い系統的關係にあるとみなす。また、マダガスカル<sup>2)</sup>の言語に見出されるサンスクリット語借用語は、ほとんどすべてがインドネシアの諸言語にも見出されるが、その数はインドネシアにおけるほど多くないのは、インド文化の影響がまださほど浸透していなかったとみて、移民の開始は西暦5世紀以降であったと推定する [DAHL 1951: 366-369]。

しかし、IV章で暦法について論じるように、日常生活における重要な部分がすでにインド化していた事実に注目しなければならない。この移民は、西暦5世紀ごろのカリマンタンからとして、インドネシアでは最古のサンスクリット語碑文によってその存在が知られる、Kutai 王国 (Mulawarman 王) ともっとも深い関係があったことが可能性として考えられる。

しかし Adelaar は、マダガスカル<sup>3)</sup>の言語のサンスクリット語借用語は、マレー語、ジャワ語を直接経由したとみなし、移民は、5世紀ごろ、南部スマトラから出発したとみる。南部スマトラではその後7世紀に、Sriwijaya 王国が誕生した。この時期は言語年代学による結果とは食い違いが、Adelaar は言語年代学の方法論的有效性そのものを疑問視しているから、最初から議論はかみ合わない [ADELAAR 1989: 42]。

なお大林太良は、8世紀から9世紀にかけてのインドネシアの国家進出の時期に、マダガスカルへの人の移動もあったと考える [大林 1991: 64-66]。マダガスカル<sup>4)</sup>の最古の遺跡は9世紀から存在する点で、年代的には一致するが、考古学的には移民がさらに数世紀さかのぼり得ることも示唆されている [VERIN 1986: 50]。

これまでに Dyen はマダガスカル語とマアニャン語とが分岐した年代から Dahl 説を妥当だとみなし [DYEN 1953: 590]、また Bellwood も Dahl 説に賛成する [BELLWOOD 1985: 124]。しかし、Dahl 説にたいしては批判もある。Solheim II は、5世紀の東南アジアにおけるマアニャン文化を再構成し得るような、そしてその当時、マアニャン族が海岸地域に居住していたというどんな証拠もない [SOLHEIM II 1965: 34-35] と消極的である。

その後、Dahl は、南部カリマンタンの言語に基層語として海洋民族のマドゥラ人のマドゥラ語が影響を落しているとみて、マダガスカル<sup>5)</sup>の言語にはマドゥラ語からの借用語がカリマンタン経由で間接的のみならず、移民の途中でも拾われて直接的にもはいり込んでいると考えるようになっている [DAHL 1977: 95]。

私自身、カリマンタン説にはやはり無視できない根拠があるとみなす。しかしマダガスカル<sup>6)</sup>の言語の形成には、単一の言語系統だけを問題にしていたのでは説明できない点がある。それらについて、以下で述べることにする。

### Ⅲ. メリナ語とカリマンタンの諸言語との関係

マダガスカルの言語が、インドネシアのどの地域の言語ともっとも深い関係をもつかについてこれまでに確定的なことはわかっていないが、現在まで明らかにされている研究状態を整理し、そこからひとつの可能性を探り出すことはできる。

Dempwolff が試みたオーストロネシア諸語の比較から再構成された語彙数は約2,200に達する [DEMPWOLFF 1938]。その全対応例からマダガスカルのメリナ語 (Dempwolff の引用する言語名ではホヴァ語) について、表1のような共起する語彙の頻度数が得られた。+ は対応例として出現することを表している。

この結果から、まずメリナ語 (Mrn.) に Dempwolff がインドネシア語派の比較に用いたすべての言語、マレー語 (Mal.), ジャワ語 (Jav.), トババタク語 (ToB.), ンガジュダヤク語 (NgD.), タガログ語 (Tgl.) のすべてと対応する例が129項目あることは、メリナ語がオーストロネシア語族のインドネシア語派の一言語として同定されることを有力に証明するものである。いっぽうで、つぎにタガログ語を除いた対応例が66項目と多いことは、タガログ語が分出したあとのインドネシア中枢部の言語と、より共通する語彙の特徴をもつことを物語る。それは、とくにマレー語、ジャワ語、トババタク語と共起する例が、35項目から20項目にかけ、集中して出現する様子からもわかる。しかし、タガログ語とのみ対応する例が37項目あることは、メリナ語、

タガログ語ともインドネシア語派の両端に位置するため、言語圏論的に共通の古語を維持し、中央部では語彙の入れ換えが行われたことを意味している。

しかし、Dempwolff のリストから、メリナ語がンガジュダヤク語とのみ共有する語彙が20項目あることに注目すべきである。これは、地域的で特殊な語彙が両言語にだけ共通することを意味する (ちなみにメリナ語とジャワ語との対応例は9項目しかない)。

表1 メリナ語対応語彙と頻度数

129	Mal.:	Jav.:	ToB.:	NgD.:	Tgl.
66	+	+	+	+	
43	+		+	+	+
37					+
35	+	+		+	+
32	+	+	+		
27	+	+	+		+
26	+	+			
24	+	+		+	
22	+	+			+
22	+			+	
20	+		+	+	
20			+		+
20				+	

その20項目をマアニャン語 (Mny.) [DAHL 1951; HUDSON 1967], ドゥスン語 (Dsn.) [HUDSON 1967], バクンバイ語 (Bkp.) [DJANTERA KAWI 1985] などの南部カリマンタンのバリト諸語と、必要に応じ、その他の言語データも補ってつぎに示すことにする。

なお以下において Dempwolff の表記による再構音は印刷の都合上、つぎの括弧のなかのように書き改めた: ə(e), v(w), t̚(T), d̚(D), l(r), t'(s), d'(z), n'(ny), j(y), k'(c), g'(j), ŋ(ng), ɣ(R), h(q), ' (h)。ただし、語頭と語末の ' は ['] を除き省略した。また各種の記号について、\*は比較言語学的な音韻対応に基づいて再構成された形、> (または<) は由来する、→ (または←) は借用された、: は対応する、~ は交替する、[ ] はその音の、あるいはそのなかのいずれかの音の可能性がある、( ) は省略可能な部分である、を、それぞれ表す。また本論で使用した略号は、論文末に略号表を掲げてある。

メリナ語は、公的にはマダガスカル語 (フランスの慣用ではマラガン語) と呼ばれ、マダガスカルの標準語とみなされる。以下では現行の正書法で示すが、発音上とくに注意すべき点は、o は [u]、語末の -y は [i] と発音され、tr と dr は、それぞれ、t と d の反り舌音を表す。なお語末母音は、通常、無声化される。強さアクセントが第2尾音節 (penult) に、ただし、語末音節が -ka, -na, -tra のときは第3尾音節 (antepenult) に置かれるのが原則である。再構成形と同じ場合の意味はいちいち記さない。

- 1) \*babi 「女性」 > NgD.bawi : Bkp.bawi : Mny.Dsn.βaβe~βaβei : Mrn.vavy~  
-bavy
- 2) \*ba[r]i 「調理したコメ」 > NgD.bari : Bgs.bari 「干し飯」 : Mrn.vary 「稲粃」
- 3) \*belum 「生きる」 > NgD.belom : Mny.Dsn.βelum : Bkp.belum : Mrn.velona
- 4) \*besay 「襪」 > NgD.besai : Bkp.besai : Mrn.fi-voy
- 5) \*bingbing 「保つ (手持つ)」 > NgD.Bkp.imbing 「握る」 : Mrn.vimbina 「運ぶ」
- 6) \*dilap 「嘗める」 > NgD.jelap : Mrn.lelaka,lelaf-ina
- 7) \*[d]aven 「葉」 > NgD.Bkp.dawen : Mny.Dsn.raβen : Mrn.ravina
- 8) \*ingkuk 「曲った」 > NgD.ingkok : Mrn.fa-ingoka 「曲線」
- 9) \*kaRang 「乾いた」 > NgD.kahang-an 「乾きすぎ」 : Mrn.hazana
- 10) \*ki(ny)zak 「踏む」 > NgD.kijak : Mrn.hinjaka 「踊る」
- 11) \*-labaw 「ネズミ」 > : NgD.balawau : Bgs.Mdr.Mks.balao : Mrn.voalavo
- 12) \*menyak 「脂肪」 > NgD.enyak : Mrn.menaka

- 13) \*nupi「夢」>NgD.Bkp.nupi : Mny.upi~nga-nupi「夢見る」 : Mrn.nofy  
 14) \*pahi「下肢」>NgD.pai「骨」 : Bkp.pai「脚」 : Mrn.fe「脚」  
 15) \*pungpung「集める」>NgD.pumpong : Mrn.fompona  
 16) \*qaseng「呼吸する」>NgD.aseng ~ba-haseng : Mrn.aina「生命」  
 17) \*sampang「脇道」>NgD.sampang : Mrn.sampana「枝」  
 18) \*si[dD]ang「傾いた」>NgD.sidang~sirang : Mrn.sirana  
 19) \*[t]a[r]ung「知らせ」>NgD.tarong : Mny.tarong「言葉」 : Prov.tarona「会話」  
 20) \*[t]ukat「登る」>NgD.tukat : Mrn.tukat「梯子」 : Mrn.tohatra「梯子」

このうち祖語において 6)は \*dilat, 7)は \*dahun~\*Daqen, 8)は \*bingkuk, 9)は \*keRang, 10)は \*i(ny)zak~\*pizak~\*[t]i(ny)zak, 12)は \*minyak, 16)は \*eseng, 17)は \*simpang のような交替形をもち、音韻的にメリナ語はバリト諸語と同じ祖語形に由来する点が注目される。また祖語から同じ意味変化を行っている 2), 19), 20)にも注意すべきであろう。

また Dempwolff の20項目以外にもカリマンタン系の語として追加すべき項目として、

- 21) \*[dD]anum「水」>NgD.danum : Mny.Dsn.ranu? : Mrn.rano  
 22) \*[dD]angaw「小屋」>Mny.dangau : Mrn.trano「家」  
 23) \*sira[q]「塩」>Dsn.sira? : ToB.sira : Mrn.sira<sup>2)</sup>。

さらにメリナ語とバリト諸語でともに、つぎのような祖語からの特殊な音韻変化を共通に被っていることは、偶然の一致とはみなしにくい。ことに \*li>di というマダガスカル東部方言の特徴を保っていることは、南部カリマンタンからの移民がマダガスカルの北東部から居住を開始したことを示唆をするものであろう。

- 24) \*sampay「達する」>Mny.hampe : Mrn.ampi「十分な」  
 25) \*sungay「川」>Mny.Dsn.hungei : Mrn.ony  
 26) \*tali「綱」>Mny.tadi : Mrn.tady<sup>3)</sup>  
 27) \*lima「5」>Mny.Dsn.dime : Mrn.dimy<sup>4)</sup>

とくに地域性を発揮する語彙として、原バリト語 (PBRT) として再構成された語がメリナ語と対応する若干の例がある。すべて著者による再構形 [SAKI] である。

- 28) \*bi[sc]ik「蟻」[SAKI]>Mny.Dsn.βisik : Bkp.bitik : Mrn.vitsika

2) この語は台湾諸語 (たとえば、アミ語 tsirah, ブヌン語 kha-sila) にも残るが、インドネシア語派の中央部で消失してしまった。

3) ただし、\*suling「竹笛」>Mny.suling : Mrn.sudina のような例外は、Mny. が NgD.suling を借用したために起った [DAHL 1951: 340]。

4) この最後の \*-a>-e のような変則的音韻変化は、カリマンタンにかつて存在した基層言語の影響に起因する [DEMPWOLFF 1937: 52]。

29) \*kenah「魚」[SAKI] > Mny.Dsn.kenah : Mrn.hena「肉」

30) \*labit「遠い」[SAKI] > Mny.Dsn.laβit : Mrn.lavitra

31) \*tabiq「脂肪」[SAKI] > Mny.Dsn.taβeʔ : Mrn.tavy

また現在、マアニャン語だけとの対応が判明しているため、祖語の再構成にはいたらないが、やはり語源的に地域性を反映する語に、

32) Mny.lalung「蝶、蛾」: Mrn.lolo

33) Mny.ma-haket「イグサ科」: Mrn.ahitra「草」。

このような音韻的語彙的に共通する傾向から判断するならば、マダガスカルと南部カリマンタンとの間には、かつて密接な言語系統的關係が存在したことを無視することはできないと思われる。ただし、現在のマアニャンの言語、文化だけを問題にすれば、アナクロニズムにおちいるであろう。問題とすべきは5世紀ごろの言語、文化の状態であるから、諸言語の比較と意味変化によって、可能な限り過去の状態を跡づけることが方法論として要請される。

現在、インドネシアでは航海民族としてスラウェシのブギス族、マカッサル族などが有名である。しかし彼らがどのような方法で移民として加わったのか。さきのDempwolfの20項目のうち、2), 11) はカリマンタンから南部スラウェシのブギス語(Bgs.)、マンダル語(Mdr.)、マカッサル語(Mks.)にまで分布範囲があり、バリト諸語のみに限定されない点が注目される。これはカリマンタンのKutaiにおいて、南部スラウェシの、ことにブギス族との交流がすでにあったことを物語るのではない。ただし、資料としては19世紀末に、カリマンタンにおけるブギス族移民の報告があり[Bock 1881: 181]、18世紀末に来日した南蛮船にも「ブーギス」人が船員として乗船していた[森島 1972: 20]。このブーギス人とはブギス族であることが明らかである。

#### IV. サンスクリット語借用語

##### ——とくに暦法の導入——

つぎに借用語から渡来の時期を推定する方法として、マダガスカル語におけるサンスクリット語借用語がある。その語形はインドから直接由来したものでなく、インドネシアの諸言語にいったん借用された語彙がはいたことを示している。このようなサンスクリット語がインドネシアにもたらされた年代は、すでに述べたように Dahl は、カリマンタンで発見された最古のサンスクリット語碑文の存在によって西暦5世

紀以降と推定する。

現在のメリナ語では廃れてしまった暦法に関する語彙を、そのサンスクリット語語彙から古ジャワ語 [ZOETMULDER 1974: 192-194], Flacourt による17世紀中ごろの南部のアンタヌシ語 [FLAC], 北部内陸部のツィミヘティ語 [深沢 1989], メリナ語 [RAZAFINTSALAMA 1928-29], 南部内陸部のバラ語 [ELLI 1988], 東南部のアンタイムル語 [DECARY 1951: 207] によって比較すれば表2のようになる。なお、マダガス

表2 マダガスカルにおける

サンスクリット語 → Ojav.	アンタヌシ語	ツィミヘティ語
āṣāḍha 6月～7月 → āṣāḍha 6月～7月	asara-mantsina 1月 asara-manitra 2月	asara-maimbo 8月 <sup>5)</sup> asara-be 9月 雨期, 夏(1月～3月)
bhādrapada 8月～9月 → bhādrapada 8月～9月	vatra-vatra 3月	vatra-vatra 10月
āśvayuja 9月～10月 → āśwayuja=asuji <sup>1)</sup> 9月～10月	asotry 冬	asotry 11月
	safare 4月 <sup>3)</sup>	
kārttika 10月～11月 → kār(t)tika 10月～11月	hatsiha 6月	hatsiha-mbirano 12月
mārgaśīrṣa 11月～12月 → mārgaśīrṣa <sup>2)</sup>	vola-sira～vala-sira 5月～6月	vola-sira 1月
pauṣa 12月～1月 → poṣya 11月～12月	fossa 7月	vola-mposa 2月
māgha 1月～2月 → māgha 1月～2月	maka 8月	vola-maka 3月
	hia-hia 9月	hia-hia 4月
	saka-masse <sup>4)</sup> 10月	saka-masay 5月
	saka-vei 11月	saka-ve 6月
	vola-mbita 12月	vola-mbita 7月

1) これはインドネシア経由の語源説を裏付ける例として、とくに重要である [DAHL 1951: 367]。

2) サンスクリット語の mārga-śīrṣa (または mārgaśīrah) は「道の先端」と呼ばれる月。marga-「道」はマダガスカルで vola-「月」と言い換える。

3) アラビア語 safar「第二太陰月」が語源 [FLAC] であるが、現在、廃語となった。

4) saka-masse, saka-vei, vola-mbita はマダガスカルにおける新造語。saka- の意味は不明。vola-mbita は「終りの月」の意味である。

5) asara の複合語は, asara-mantsina (～hantsina)「死体臭の月」, asara-maimbo (～imbo)「臭い月」, asara-be「大きい月」の意味である。

カルのサンスクリット語起源の暦法は、網羅的ではないながら Gonda でも断片的に触れられている [GONDA 1973: 131-134]。

現在、メリナ語では、アラブ十二宮に基づく方位名称か、最近ではフランス方式を一般に用いる。アラビア語借用語では、1月から12月は方位と対応させて、Alahamady「北北東=1月」、Adaoro「北東=2月」、Adizaoza「東北東=3月」、Asorotany「東南東=4月」、Alahasaty「南東=5月」、Asombola「南南東=6月」、

インド起源の月名

メリナ語	バラ語	アンタイムル語：アラビア名称
asara-maimbo 9月 <sup>6)</sup> asara-manitra 10月	sara-matsy 11月 sara-manitsy 12月 雨季、秋～冬 <sup>10)</sup>	asara-masay <sup>11)</sup> : Alohotsy asara-be: Alahamady
vatra-vatra 11月 <sup>7)</sup>	vatra-vatra 1月	vatra-vatra: Adaoro
asotry 12月 <sup>8)</sup>	asotry 乾季、春	asotry: Adizaoza
hasina 1月	hatsiha 3月	hatsia: Asorotany
vola-sira 2月	vala-sira 4月	vola-sira: Alahasaty
faosa 3月		fosa: Asombola
maka 4月	maka 6月	maka: Adimizana
hia <sup>9)</sup> 5月	hia-hia 7月	hia-hia: Alakarabo
sakamasay 6月	sakamasay 8月	fisakamasay: Alakaosy
sakave 7月	sakave 9月	fisakave: Aijady
vola-mbita 8月	vola-mbita 10月	vola-mbita: Adalo

<sup>6)</sup> asara のアラビア語 As-sahr「雨季」語源説 [RICH] は適当でない。asara-manitra (～hanitra) は「香る月」の意味である。

<sup>7)</sup> vatra-vatra は「夕立」 [RICH] の意味もある。

<sup>8)</sup> asotry～asotra は「冬、乾季 (=main-tany「乾いた土地」)」 [RICH]、「田犁」 [RAZAFINTSALAMA 1928: 163] の意味もある。

<sup>9)</sup> hia は「不毛」 [RAZAFINTSALAMA 1928: 163] の意味もある。

<sup>10)</sup> ただし asara という語で。asara と sara は語源的に同じである。sara-matsy (～hatsy) は「臭い月」、sara-manitsy (～hanitsy) は「香る月」の意味である。

<sup>11)</sup> asara-masay は「小さい月」、asara-be は「大きい月」の意味である。

Adimizana「南南西＝7月」、Alakarabo「南西＝8月」、Alakaosy「西南西＝9月」、Adijady「西北西＝10月」、Adalo「北西＝11月」、Alohotsy「北北西＝12月」のように呼ばれる。またツィミヘティ語の場合も、伝統的な月名を知る人は、40～50歳以上の男性に限られる[深沢 1989: 396]。バラ語では *mezoliky* が「2月」、*zaray* が「5月」と呼ばれるが、これは他と対応していない。

インドネシアを経由したインドの暦法は、マダガスカルでかなりの部分が切り落とされた。サンスクリット語 *phālguna*→OJav.*phālguna*「2月～3月」、*caitra*→*cetra*「3月～4月」、*jyaiṣṭha*→*jyēṣṭha*「5月～6月」、*śrawaṇa*→OJav.*śrawaṇa*「7月～8月」がマダガスカルでは消失した。しかし、*vaiśākha*→*weśākha*「4月～5月」に由来する *fisaka* が、Gonda によれば、1603年に出版された F. de Houtman のマレー語・マダガスカル語の比較語彙集にはまだ記載されていた [GONDA 1973: 191]。

このように民族間で月名にたいするずれが細部において発生したのは、マダガスカル各地の気温、降雨量にはかなりの差があるものの、雨季(11月～4月)と乾季(5月～10月)という二つの季節のあることでは共通し、このような乾季雨季を各地の農耕サイクルに合わせたからだと考えられる。そして2月から8月までがすっかり抜け落ちたのは、この時期がちょうど乾季に当たり、農耕活動はほとんど休止しているからである。ツィミヘティ族の場合でも、3月にイネの収穫が終ったあと、4月からは瘦せ月 *hia-hia* と呼ばれ、農作業の終る月 *vola-mbita* の7月へといたる[深沢 1989: 396]。とくにメリナ族やベツィレウ族は、この農閑期の6月から9月にかけて、祖先の墓を開いて二次葬祭や遺体との再会儀礼が行われる。「死体臭の月」というのは、そのような行事と関連して生まれた名称であることが明らかである。

*asara* のもとの用法である6月～7月は、インドネシアでも平均的に乾季でももともと雨量の少ない時季にあたる。古ジャワ語の詩(Bhomantaka)には「*aśāḍha* 月には森が元気を失う」と歌われている [ZOETMULDER 1974: 171]。

*asara* が乾季から雨季への変り目の月を表したことは、諸言語において、この前後の月を「小=臭：大=香」という意味的対立概念を示す形容詞で *asara* を修飾して用いられることからわかる。そして *asara* を出発点に、インド起源の暦名の順序がほぼ踏襲されている。ただし、*asara* が大概念として雨季を表すこともあるのは、「小 *asara*: 大 *asara*」というような用法が定着したあとで、二次的に獲得した意味ではないかと考えられる。それはツィミヘティ語の場合でも、*asara* が乾季 (*main-tany*「乾いた土地」) と、一次語で対立する概念ではないことからいえる。

このように解釈すると、Flacourt のアンタヌン語への月名の当て方だけに問題が残

る。このようなことが起ったのは、Flacourt が asara を一年の開始月とみて、それに対応するフランスの月名を janvier「1月」から機械的に訳語として与えたためではないか、と推定される。

インドでは、一年は太陽の運行と月の満ち欠けによって決められ、元旦は、太陽が春分に白羊宮にはいったときをもって caitra 月と呼ばれた [井原 1944: 456-457]。表 2 には古ジャワ語形で示したが、カリマンタンには、現在、このような暦名は伝わらない。しかし、紀元後からヒンドゥー化時代が始まったことは、ソガジュダヤク族に現在も見出される、最高神に添える Mahatara, Bahatara Guru のような敬称がサンスクリット語起源であることから知られる [シェーラー 1979: 16]。現在のカリマンタンでインドの暦法は失われたが、インドで蝕を起し復讐する悪魔として知られている Rahu (羅侯) のみは、OJav.rahu : Mal.rahu : ToB.lau などのほか、南部カリマンタンでも Bkp.rakun「天」、Mny.rakon「雲」、南部スラウェシの Bug.raehu「雲」、フィリピンの Tgl.laho?「月蝕」などのように、意味変化をともないつつ借用語として維持され、マダガスカルでもこの語は Mrn.rahona : Vez.Bar.raho「雲」のように継承される。しかし、インドでは Rahu と対になって登場する悪魔 Ketu (計都) [井原 1944: 463] は、OJav. はもとより、現在のインドネシア諸語にも伝わらない。なお、Mrn.rahona は、\*k>h という音韻変化からカリマンタン諸語を経由したとみなすのがもっとも妥当である [DAHL 1951: 325]。

## V. マダガスカル移民の新環境への適応

インドネシアからマダガスカルに航海した移民たちは、彼らを取り巻く環境にどのように適応していったかを、つぎに若干の民俗語彙に依拠しながら略述してみよう。以下の PAN (原オーストネシア語形) は、Dempwolff, Blust, Verheijen および筆者によって再構成された形である。ただし、Dempwolff 形についてはとくに注記せず、それ以外は、それぞれ [BLUS] [VERH] [SAKI] と記す。マダガスカルの言語はとくに記す以外、メリナ語である。

もっとも重要な言葉、カヌー lakana の語源は不明である。ただし、帆 lay には PAN \*layaR が残された。海は「塩辛い水」rano-masina (<PAN \*[dD]anum 水 +\*(m)-asin), 魚は「水の獲物」haza-ndrano (<PAN \*kaya 財産 +\*(n)[dD]anum) のように複合語になったことは、これらが一般的に基礎語彙とみなされるにもかかわらず、安定していないことになる。いっぽう、故里のカリマンタン系の言葉、魚 (た

たとえば Mny.kenah) が肉 hena に意味変化した。これは、彼らの生活に占める漁撈への依存が低下したことと関係があろう。また PAN 起源の魚名がほとんど伝えられていないことも、このことと関連する。ただし、川や沼で魚を捕る筈は、故里の言葉 vovo (<PAN \*bubu>NgD.bowo) とともに伝承された。

航海中、魚はカマス (Spraeidae) がもっとも重視された。PAN 起源の魚名が少ないなかで、PMP \*qalu[Blus I] (>Mal.alu-alu : Pal.ʔái) に由来するこの言葉は、いまも東海岸のベツィミサカラ族の alo-alo、西南海岸のヴェズ族の alo-alo に見出される。またカマスのほかにはサメ科 Vez.a-kio : Skl.a-kiho、タコ horita、タイマイ fano も、それぞれ、PAN \*ki[y]u, \*[h]uRita, \*penyu が継承されている。いっぽう、島の付近に出没したマッコウクジラ (*Physeter macrocephalus*) やオーストラリアセミクジラ (*Balaena australis*) にたいする trozona の語源は、この巨大な海獣をジュゴン (PAN \*Duyung>Mal.duyung) にたとえた表現に由来する。

方位についても修正が行われた。出発地の「西または北西風、嵐」(PAN \*baRat~\*qa-baRat) は北 avaratra、「東または南東風、雨風」(PAN \*timuR) は南 atsimo へと、マダガスカルで時計回りに90度位置がずれた<sup>5)</sup>。この意味変化は、インドネシアで西が、強風の吹く方向をさしていたことと関係がある。マダガスカル西岸では、9月から2月にかけて強い北風が吹き、4月から9月は南風が変わる [DAHL 1951: 326]。また angina-bohits という、語源的には「山風」(PAN \*angin+\*bukit 丘) という複合語が、17世紀には西北西風 (galerie) を意味していた [FLACOURT 1658: xii]。この風は、彼らが南東貿易風によってマダガスカル島に接近したあと、舟を島に着けるため、必要とした風であったろう。南半球に位置するマダガスカルでは、北方が上位とみなされ、ベツィミサカラ族のことわざにも「上座は北方」'Ny tany ambo avaratra.'といわれる。ただし、マダガスカルで北北東 Alahamady は、祖先や死者の住むもっとも聖なる方向とみなされる [MOLET 1979: 49-72]。したがって、このような認識とも意味的に連合していることが明らかである。

航海で星や星座がコンパスとして利用されたことはオーストロネシア民族の航行方法から想像に難くないが、精神生活面でも星占いが盛んに行われ始めたことが、運 vintana が星 (PAN \*bintang) に由来することによって判明する。ただし、その内容は、のちにアラブ起源の十二宮によって置き換えられた。なお、星 k-intana は \*bintang の交替形 \*[h]intang に由来し、Jav.l-intang とのみ同族語関係がある。

5) avaratra は、PAN \*R>Mrn.z という規則的音韻変化からはずれる。したがって、この語は借用語であるとみなす [DAHL 1977: 95; ADELAAR 1989: 11]。

上陸後、彼らがまず建てた住いは掘立小屋であった。家 *trano* が小屋 (PAN \**[dD]angaw*) に由来するのはそのためである。しかし、マアニャン族が焼畑耕作用に村の外に半永久的な集落として建てる、PAN \**[dD]angaw* に由来する簡易小屋 *dangau* [HUDSON 1972: 71-83] への意味的牽引も無視できないであろう。ようするに、この言葉は仮寓への表現であった。したがって、小屋に付随した屋根 *tafo*, 軒 *vovonana* は、PAN \**atep*, \**bubung* が、それぞれ、継承された。しかし、インドネシア諸語に広く分布する家 (\**Rumaq* > Mal.*rumah* : Jav.*omah* : NgD.*Bkp.huma*) は、岩窟を意味する *zoma* にその語源が留められたまま、その後、この言葉は意味的にふたたび変化することはなかった。

上陸したのち、ワニ *voay* (<PAN \**buqaya* > NgD.*sa-buaya* 「祖霊としてのワニ」), ネズミ *voalavo* (<PAN \**-labaw* > NgD.*balawau*), コウモリ *fanihy* (<PAN \**pa[n]-iki* > Tgl.*paniki*), 鳥 *vorona* (<PAN \**burung* > NgD.*burong*), サギ科 *vano* (Ardeidae) (<PAN \**bangaw* > NgD.*bangau*), カイツブリ科 *vivy* (Podicipedidae) (<PAN \**bibi* > Mal.*bebek*), 蝶または蛾 *lolo* (: Mny.*lalung*), バッタ *valala* (<PAN \**balang* > Mal.*bĕlalang*), 蟻 *vitsika* (<PBRT \**bi[sc]ik* > Mny.*Dsn.βisik* : Bkp.*bitik*) などのような動物や昆虫には、主として故里の南部カリマンタン系の言葉が残された。

しかし *lolo* には、あらたに「死霊」の意味が加わった [DECARY 1951: 231]。ワニはスワヒリ語 *mamba* の借用語で *mamba* ともいわれる。カリマンタンではワニが神聖視される。ンガジュダヤク族でワニを「祖霊」(*sangiang*) のひとつとみなす [シェラー 1979: 21] ような事例は、マダガスカルにおけるワニにたいする信仰とも共通し、起源的なつながりを示唆するものである。

カリマンタンでトーテム動物とみなされるサイチョウ (PAN \**enggang* > Mal.*ĕnggang*) はマダガスカルには生息しなかったが、人びとは「鳥の羽」をこの語源によって *enggana* と呼んだ。これは鳥の羽が装飾用に使用されていたための類推によるものであろう。ただし現在、*enggana* は地方語として残るのみで、その後、翼を意味する南部カリマンタン系の *elatra* (<PAN \**elaj* [DAHL 1951: 71-72] > Mny.*elat*) によって初期の「鳥の羽」は駆逐されてしまった。

タビビトノキ (Ⅶ章18参照), なん種かのパオバブ (*Adansonia grandidieri*, *Adansonia fony*), 巨大鳥のエピオルニス類 (*Epiornis*) には既知の語彙的材料からあらたな複合語が作られ、それぞれ、「森の葉」*ravi-n-ala*, 「森の母」*re-n-ala* あるいは「マダガスカルルリバト (*Alectroenas madagascariensis*) のいる木」*fony* (<PAN \**pu-nay* 「野生バト」), 「林間鳥」*voron-patra* (<PAN \**burung* + \**pa(n)dang*) と比喩的

に命名された。エピオルニスが林間鳥と呼ばれたことは Flacourt の記述から判明するが [FLACOURT 1658: 165], その後間もなく、エピオルニスはこの言葉とともに絶滅してしまった。マダガスカルではじめて出会った、ヤシ科のラフィアヤシ *rofia*~*rafia* (Ⅶ章40参照), サトイモ科のティフォノドルム *via* (Ⅶ章14参照) にたいしては、それぞれ、故里のサゴヤシ, クワズイモへの比喩が行われた。さらにバオバブの一種 (*Adansonia za*) には *za*, ヤシ科のエダウチヤシの一種 (*Hyphaene spp.* [Rich]; *Hyphaene shatan*~*Medemia nobilis* [Caba]) には *satra* または *satrana*, 特徴のあるハウシヤガメ (=マダガスカルホシガメ) (*Geochelone raidiata*) には *sokatra* のように語源不明の造語が行われた。

とくに原猿類 (Prosimii) には, アバヒ (*Avahis laniger*) に *avahina* (~*vahina*), アイアイ (*Daubentonia madagascariensis*) に *aiay* (= *fanaha* : Bts.ahay), インドリ (*Indri indri*) に *endrina* (~*hendrina*), ワオキツネザル (*Lemur catta*) に *maky*, ペロシフカ (*Prophitecus verreauxi*) に *sifaka* (Skl.), カンムリシフカ (*Propithecus diadema*) に *simpona*, ネズミキツネザル類 (*Microcebus spp.*) に *tsitsy* (~*tsitsy* Skl. ただし Atk. ではコビトキツネザル類 (*Cheirogaleus sp.*) をさす) などのように, 種, 亜種での区別が行われた。このなかでもインドリ科 *avahina*, *endrina*, *sifaka*, *simpona* とアイアイ科 *aiay*=*fahana* にたいし, 一次語が多く造語されたことが注目される。

家畜や大型動物には, PAN の名称がまったく維持されない。たぶん, 故里で使用されていた名称が完全に忘れられるほどの年代が経過したあと, 家畜がスワヒリ語を話す民族によってアフリカ大陸からあらたに持ち込まれた。ただし, スワヒリ語が東アフリカ一帯での共通語であることを考えると, それが何族によってもたらされたのかは, べつに考えなければならない問題である。

たとえば, ニワトリ *akoho* (←*kuku*), イヌ *amboa* (←*mbwa*), ウシ *omby* (←*ngombe*), ヒツジ *osy* (←*mbuzi*), ロバ *ampondra* (←*punda*), また家畜のダニ *kongona* (←*kungani*) もそれに付随した。またトビ (タカ科) *pa-pango* (*Milvus migrans*) もハヤブサ科の一種 *kipanga* (*Falco dickinsoni*) が意味変化のうえ借用された。

また, 故里には生息しなかったヒツジ *usi* (←*mbuzi*), ホロホロチョウ (ホロホロチョウ科) *akanga* (*Numida meleagris*) (←*kanga* (*Numida mitrada*)), 野生ネコ *ampaha* (←*paka*) なども, それぞれ括弧のなかのようなスワヒリ語を通じて識別した<sup>6)</sup>。衣服用の布地 *lamba* は PAN \**lamba*[r] (>Mal.lēmbar : NgD.rambar 枚 (数量詞) :

Mny.lamba(h) 衣類) が維持されたが、多くの生活用具は、スワヒリ語を話す民族からあらたに導入された。たとえば、上着 akanjo (←kanzu), 女性用腰巻き kitamby (←kitambi), 小刀 kiso (←kisu), 柄付水汲み zinga (←mzinga), などがそれである。

## Ⅵ. 移民の歴史——稲作の開始と牧畜の導入——

イネに関する語彙の意味的変遷は、マダガスカルへの民族移動についての情報を与える。

### 第1期 南部カリマンタン (スラウェシ) 前期

もとの「イネ」を表したインドネシア系の言葉は、複合語としてイヌビエ (Ⅶ章31参照) をさす「イネでないもの」tsi-mpari-fary [RICH] という命名に残された。このような造語法が現れた理由のひとつに、最初の移民は播種すべき米穀をもってゆかなかった可能性が考えられる。Blust は tsi-mpari-fary に「野生イネ」(wild rice) という意味を与える [BLUST 1977: 32]。マダガスカルには3種の野生イネ (*Oryza perrieri*, *O. punctata*, *O. perennis*) が存在する [ABE 1984: 177] が、tsi-mpari-fary はマコモ類 (*Zizania* spp.) にたいする名称であった可能性もある。Blust 説によるならば、最初の移民によって野生イネと呼ばれた対象が、稲作の開始とともに田や畔の雑草をさすように変化したことになる。ヒエ類は東南アジアから栽培イネの伝播とともに全世界の水田に広がった [中尾 1966: 120] といわれるから、このような意味変化が起るのは当然であった。

fary はこの一語で、同じイネ科のサトウキビを意味する。マダガスカルにサトウキビが導入されたのは19世紀初頭以降 [CABANIS *et al.* 1970: 891] というのはただしくない。すでに17世紀に、マダガスカルではサトウキビが豊富に生育し住民がそれから酒を造っている、との記述がある [FLACOURT 1658: 120-121]。原オーストロネシア民族はすでにサトウキビ (PAN \*tebuS [VERH], \*CebuS [BLUS IV]) を知っていた。マダガスカルにおけるサトウキビの歴史は、一般に考えられているほどあたらしくはない。

このように、稲作をすでに知っていたにもかかわらず、インドネシアからの最初の

6) スワヒリ語の影響は基礎語彙にまで達した。目 maso は PAN\*mata (>Mal.mata: NgD.mate: Bkp.mate) とは関係なく、スワヒリ語 macho の借用語である [DEMPWOLFF 1937: 88]。

移民はマダガスカルに上陸したあと、ただちに稲作には従事せず、その後、イネに関する知識を忘れさるほど、幾世代かが経過した。ここにおいてマダガスカルでは、故里の本来の「イネ」を意味する言葉とそれが表す稲作文化との連合が、途絶えてしまうこととなる。彼らが主食としたのはタロイモ *saonjo* やヤムイモ *ovy* (Ⅶ章8参照) であり、またマダガスカル原産のサトイモ科ティフォノドルム *via* (Ⅶ章14参照) も救荒用に食べられた。イヌビエも食用になったであろう。しかし、インドネシアから伝えてきた、主食と副食(=「おかず」 *laoka*) とを区別する食文化は、名称(PAN \**lahuk* > Mal.*lauk* : NgD.*Bkp.lauk* : ToB.*laok* : Tgl.*lahok*) の維持とともに、現在にいたるまで変ることがなかった。

## 第2期 南部カリマンタン後期

籾米はその後の移民によって持ち込まれたが、この移民は、後に伝説上のヴァジンバ族 *Vazimba* と呼ばれる先住民となる<sup>7)</sup>。ただし、それ以前に渡来していた移民との関連、またヴァジンバ族が現在の何族につながるのかは不明である。しかしヴァジンバ族がメリナ族と形質的文化的に非常に違っていたとみなす必要はない [Block 1971: 17] という見解もあるように、彼らが同じインドネシアからの移民であったとすれば、文化的にみて基本的に大きな相違はなかったということもできる。

ヴァジンバ族は土地にたいする霊的優位にたったとみなされるほか、ヴァジンバ族からイネをもらったとする伝説が多い。とくにメリナ族の伝説では、ヴァジンバ族から焼き籾をもらったという [高谷他 1989: 451]。言語的にも、基層語としてのヴァジンバ族の言語から影響を受け、現在の東部方言の特徴となる。ことにその音韻的影響は甚大であった。

ヴァジンバ族からももらったという籾米にたいし、現在、インドネシアではきわめて局地的な分布を示す「干し飯」あるいは「焼きゴメ」を意味する、調理したコメをさす言葉 *vary* があてられた (Ⅶ章13参照)。この名称はもともとヴァジンバ族の言葉に由来する。彼らは長い航海の船上食として加工したコメを携えていたのである。しかし、マダガスカルに上陸後、籾米にたいしても、この *vary* が引き続き使用されたことになる。ただし、マダガスカルのイネの系統は、現在、水稻品種の *Indica* が全島に分布するが、これは比較的あたらしく、東海岸を中心に分布する東南アジア島嶼部系の陸稲品種 *Javanica* がより古いと推定されている [田中 1989: 389-392]。ヴァジ

7) Dahl は、ヴァジンバ族という呼び名はバントゥー系民族のように聞こえるという [Dahl 1988: 91]。しかし、民族と呼称とが同系統であるとは限らない。

ンバ族伝説とこの分布とがどのように結びつくかは不明な点も多い。しかし、ヴァージンバ族の時代の中央高地では、*Javanica* が *Indica* にまだ圧倒されていなかった可能性も考えられる。

長期間にわたる航海によって余儀なくされたコメにたいする唯物的対処法は、コメやその生育にまつわる信仰を消失させた。すなわち、マダガスカルにおけるイネにたいする儀礼やコメにたいする稲魂信仰の欠如、稲作に関する故里の一次的語彙がほとんど残存しないことなどがそれを裏づける<sup>8)</sup>。稲作は、母文化における稲作文化複合をシステムとしてでなく移入された結果、母文化からみればすり減った (decultured) ものとなった。水田稲作とセットになって分布する魚醬やナレズシ [石毛・ラドル 1990: 319] が存在しないことも、マダガスカルの稲作の特色をなす。ただし、稲作の起源について、パラ族に作物死体化生神話 [DECARY 1964: 49-50]<sup>9)</sup>、またある民族に天界からの作物盗み神話 [BEMANANJARA 1985: 177-178; DECARY 1951: 57] が存在することは、オーストロネシア稲作文化圏とのつながりをわずかながら保持している。

現在、稲作は基礎的生業であるにもかかわらず、農具の種類が多くないこともマダガスカルの農耕の特徴として指摘できる。まずインドネシアで使用される穂摘具 (Jav.ani-ani) や犁は見出されない。水田用の農具として一般的に使用される權型鋤 *angady* (Atd.fangady) はもともと耕起具で、メリナ族によってインドネシアから持ち込まれたといわれる [高谷他 1989: 432]。しかし、メリナ族以前からすでに持ち込まれていたとみることもできる。その語形は PAN (\*pan 道具の接頭辞 + \*kali 掘る) に由来する<sup>10)</sup>。インドネシアから直接、携えてきた農具はわずかであったが、彼らのオリジナルな知識に基づいて臼 *lona* (<PAN \*lesung), 杵 *alo* (: Prov.ak-alo <PAN \*qalu) などは、マダガスカルでそれを表す言葉とともに維持、再生産された。

8) たとえば、田 *tani-mbary* は「イネの土地」、穀倉 *trano-mbary* は「イネの家」、鎌 *antsi-mbary* は「イネの刀」、穂摘具 *iso-mbary* は「イネのナイフ」などのように新しい複合語が作られた。ただし、粃 *akotry*、苗 *ketsa*、穂 *salohy* などの語源は不明である。

9) 物語の概略はつぎのとおりである。川岸で *Lahy* (「男性」という意味) という名の男の子が母親にバッタを捕ってもらい、「小ウシ」*ki-omby* (なぜならバッタにもウシにも角があり大糞をするから) と名付けてベットにするが、逃げられて見つからない。男の子は悲しみのあまり死んでしまう。母は神のお告げで死体を沼地に埋めるが、一カ月後、死体からイネが生え、いまもこのイネは *vari-lahy* 「男のイネ」と呼ばれている。

10) この PAN 形には *hady* 「溝」も由来する。なお、Flacourt [1658: 112] には *fangali* の多様な用途が記載されている。マダガスカルと同じ權型鋤はフィリピンのルソン島でも使用されているが、*Ifig.gaud* : *Btk.gaod* という名称は、PAN \**gaut* 「掻く」(PWMP) [Blus III] に由来し、マダガスカルの *angady* と語源的な関係はない。なお、\**gaut* は *Mrn.haotra* 「引き掻く」へと変化する。

### 第3期 東アフリカ期

中央高地の灌漑稲作では、稲田を作るためゼブ牛による蹄耕が行われるが、すでに述べたように、ゼブ牛は、インドネシアの移民が渡来するまえに、アフリカから来たバントゥー語を話す牧畜民によって飼育されていた、と推定される。南部マダガスカルの Androyでは、11世紀ごろの土器の破片とゼブ牛の骨片が発見されている[RASAMUEL 1984]。ここにマダガスカルにおいて牧畜と稲作との複合が出現することになる。

### 第4期 ジャワ（スマトラ）期

ジャワ、バリでは、長い期間にわたって受けつづけたインド文化が宮廷文化と融合し、洗練された高文化として発展しつつあった。それは、マジャパヒット王朝において最盛期に達した。たとえば、ジャワではクリス（*kēris*）という神秘的力をもつ短剣が製作され、ウンプ（*ēmpu*）と呼ばれる地位にある人がその製作に携わった。クリスがインドネシア各地に伝播していったのは14世紀中ごろ以降である [FREY 1989: 7]。しかしマダガスカルには、ウンプという言葉に由来する敬称 *t-ompo* 「主人、所有者、殿」はあっても、クリス文化はまったく伝わっていない。ただし動物の骨や角、爪、植物の根、石などが神秘的力をもった呪物 *ody* として崇拝される点に、クリス発生以前の文化をみることができる<sup>11)</sup>。*ody* は、古ジャワ語の「獣脂、薬」を意味する *wuduk* が語源である。

このような事実は、渡来の時期を推定するための母文化のネガティブな側面からの根拠となる。さらにネガティブな根拠として、マジャパヒット時代の最盛期、14世紀中ごろに宮廷詩人 Prapanca によって書かれた王国史（*Nagarakertagama*）には、この王国の支配下にあった地域と政治的経済的交流のあった東南アジア、インドの国名を逐一掲げているにもかかわらず、マダガスカルについての言及がまったくみられない [SLAMETMULJANA 1976: 143]。これは、マダガスカルがジャワ人からすでに忘れられた地域となっていたことを物語る。

このようにインドネシアからマダガスカルへの移民は、14世紀以前には終了していたと考えられる。その最後の移民となったのは、農耕民族のジャワ人であった。このころには、マダガスカルまで安定した直行の航路も確定し、また現在のマダガスカル

11) 現在、ジャワ人（ひいてはインドネシア人一般）の宝石にたいする信仰には、かつての呪物としての機能の名残りを留める。

におけるあきらかなインドネシア系の女性の存在からみて、女性を従えたことも、当然考えられる。

## VII. 植物名称の維持と変遷

本章は、原オーストロネシア語からマダガスカルの諸言語にもたらされた、植物の部分名称を含む植物名称の推移と意味変化を記述する。現在もマダガスカルにおいて生薬が盛んに使用されている。このなかには、ジャワで古くから伝承されてきた民間治療薬 (*madu*) の知識を、植物名称とともに継承する場合が多い。ただし以下の項目では、マダガスカルにおいて民間薬としてのほか、各種の目的のために利用されている有用植物も含まれる。なお祖語形への意味の措定の仕方は、とくに諸言語間で意味的ずれがある場合、かならずしも簡単でない。それはそのつど説明を与える。当然のことながら、植物学的分類と民俗分類とがかならず一致するという根拠はない。

はじめての地で遭遇した新しい経験にたいし、既存の言語的知識から材料を選択し組み合わせ、あるいはまったく新しい素材から造語を作るという命名法は、植物への命名のほか、マダガスカルの地名についても地名学の研究対象として興味ある事例が見出され、今後の研究課題となろう。

本章では、研究対象とする語彙を原オーストロネシア語の一次語に限定し、二次的複合語については必要に応じ言及するにとどめた。しかし、タクソノミー研究においては、複合語も分析の対象として無視することができないことはいうまでもない。

マダガスカルの植物名称における複合語には、*ahi-*「草(総称)」(*~ahitra*: *Mny.ma-haket* イグサ科 [DAHL 1951: 322]), *hazo-*「木(総称)」(<PAN \**kayu*), *rami-*「樹液植物」(<PAN \**rami* [SAKI]) (39参照), *tsi-*「一モドキ(否定接頭辞)」, *vahi-*「ツル植物」(<PAN \**bakik*) (2参照), *vo-*「実, 種子」(*~voa*<PAN \**buhaq*), *volo-*「毛」(<PAN \**bulu*) を複合要素として含む例が圧倒的に多く、これだけで植物名称の過半数を占めるといってもよい。

まず、ほぼ原意を維持している例。

- 1) \**baRu* '*Hibiscus tiliaceus*' オオハマボウ (アオイ科) [VERH; BLUS IV] > *varo*<sup>12)</sup>  
: *Bts.bar* '*Thespesia populnea*' サキンマハマボウ (アオイ科) [CABA],  
'*Hibiscus tiliaceus*' [RICH] (: *Mal.bar* '*Hibiscus macrophyllus*; *Hibiscus*

12) ただし、PAN \**R*>Mrn.z という音韻変化の例外となる [DEMPWOLFF 1937: 89]。あるいは基層言語(マドゥラ語)からの借用語か [DAHL 1977: 95]。

*tiliaceus'* [WATS] : OJav.waru-l : Jav.waru : Mal.baru : NgD.baru)。

オーストネシア民族は、繊維を得るためのもっともポピュラーな植物としてオオハマボウを利用したが、マダガスカルではバショウ科 (35参照)、ラフィアヤシ (ヤシ科) (40参照) などが繊維用の植物としてより重要になった [Lamb 1978: 10]。東部方言圏のベツィミサラカ族は、サキシマハマボウの繊維から縄をなう。なお、Bts.baru をポリネシア語の burao [sic] と比較する [CABANIS *et al.* 1969: 295] のは誤りである。

- 2) \*bakik ツル植物 > vahy ツル植物 ( : Mal.bakek 'Piper chaba; Piper longum インドナガゴショウ (コショウ科)' [WATS] : NgD.baki)。
- 3) \*bintanguR 'Calophyllum archipelagi' テリハボク的一种 (オトギリソウ科) [VERH] (PWMP) [BLUS I] ~ \*bitaquR (PMP) [BLUS IV] 'Calophyllum spp.' > Mrn.Bts. vintanina : Skl.Atk. vintanona 'Calophyllum sp.' [RICH] : Prov. vintano 樹木名 [RICH], 'Calophyllum parviflorum' [PERR; CABA], 'Calophyllum spurium' [MALZ; RAJE], 'Calophyllum inophyllum' テリハボク [CABA; DESH] ( : Mal.bintangur ~ bëntangur 'Calophyllum spp.' [WATS; WILK] : Jav.bitangur ~ bintangur)。

'Calophyllum spp.' のうち 'Calophyllum inophyllum' は高木で、インドネシア、マダガスカルでともに建築材、カヌー材にされる。

- 4) \*buluq 竹 > volo 竹 [DESH] ( : Mal.buluh 'Bamboos generally' [WATS], 'Bambusa spp.' [WILK] : Jav.wuluh : NgD.sa-bulu ~ sa-wulu : Bug.Mks.bulo : ToB.bulu : Tgl.buho?)。
- 5) \*bunga 花 > vony<sup>13)</sup> ~ voniny 花 ( : Mal.ToB.Bug.bunga 花 : NgD.bungeh イネの花 : Mny.βonge 花 : Tgl.bunga 果物)。
- 6) \*katapang 'Terminalia catappa' モモタマナ (シクンジ科) > Mrn.hatafana : Bts.atafana ~ antafana, Mrn.hatafa : Bts.atafa 'Terminalia catappa' [RICH; CABA], 'Terminalia badamia' [RAJE] ( : Mal.kĕtapang 'Terminalia catappa' [WATS] : Jav.kĕtapang : NgD.tapang : Bug.katapang : ToB.hatapang)。

オーストロネシア語族圏では海岸付近のありふれた樹木で、堅い幹は建築

13) この例に現れる PAN \*-a > NgD.-e : Mrn.-i のような変則的音韻変化は、かつてカリマンタンに存在した基層言語 (可能性があるのは古ジャワ語) の影響によって現れた [DEMPWOLFF 1937: 52]。しかし基層言語として、Dahl は、距離的にもジャワ島とカリマンタン島の中間に位置するマドゥラ島のマドゥラ語である可能性を示唆する [DAHL 1977: 95]。古ジャワ語 (ジャワ語)、バリ語、マドゥラ語は言語構造的にきわめて近い関係にある。

材となる。また種子の仁は食用になる。

- 7) \**[t]aruk* 若芽 > *taroka* 若芽 (: Mal.*taruk* : Tgl.*talok* 若芽 : NgD.*tarok* 梢)。  
 8) \**ubi* ~ \**qubi* '*Dioscorea alata*' ダイジョ (ヤマノイモ科) [VERH; BLUS IV] > *ovy*  
 '*Dioscorea alata*; *Solanum tuberosum* ジャガイモ' [CABA] (: Mal.*ubi* 'Plants  
 producing tubers' [WATS] : Jav.*uwi* ~ *wi* : NgD.*owi* : ToB.*ubi* : Tgl.*ubi*)。

複合語として, *ofi-ala* ~ *ofi-n-ala* (< \**alas* 森) '*Dioscorea ovala*' [RICH;  
 DESH], *ovi-hazo* : Bts.*ofi-hazo* '*Ipomoea batatas*' サツマイモ [CABA; RICH] ~  
*vi-azo* ~ *vi-hazo* '*Manihot ultissima*' キャッサバ [CABA; RABE] (: Mal.*ubi-kayu*  
 '*Manihot ultissima*'), *ofi-ka* '*Dioscorea bulbifera*' ニガカシュウ [RABE] など。

*ovy*, *ubi* にはヤマノイモ科 (*Dioscoreaceae*) のほか, ナス科のジャガイモ,  
 ヒルガオ科のサツマイモ, トウダイグサ科のキャッサバのような塊茎・塊根  
 植物も含まれるが, これらはいずれも, PAN 段階には存在しなかったアメリ  
 カ大陸起源の作物である。

つぎに意味変化した例。

- 9) \**aka[r]* ~ \**waka[r]* 根 > Shn.*vahatra* '*Danais ligustrina*' ミカン科の一種 [RICH;  
 MALZ] (: Mal.OJav.NgD.*akar* 根)。

これは, マダガスカルにおいて意味が特殊化した例になる。このツル植物  
 の根は染料として利用される<sup>14)</sup>。

- 10) \**anabu* 'Shrub or small tree; *Abroma augusta* トゲアオイモドキ (アオギリ  
 科)' (PWMP) [BLUS II] > Skl.*adabo* '*Ficus sp.*' [RICH], '*Ficus cocculifolia*'  
 [CABA; RAJE] (: Hnn.*anabu* : Pal.*lab* '*Abroma augusta*')。

インドネシア語派中央部では祖語形が消滅し, たとえば, Mal. では *rami*  
*sēngat* と呼ばれる。*rami* については 39) 参照。また, その他のイチジク属 (ク  
 ワ科) として 29), 37), 38), 46) 参照。

- 11) \**bakung* '*Crinum asiaticum*' ハマユウ [VERH] > Mrn.*vahona* : Prov.*vaho* '*Aloe*  
*macroclade*' アロエ・マクロクラーダ [RICH; CABA; DESH], '*Aloe capitata*' ア  
 ロエ・カピタータ [RABE] (: Mal.*bakung* '*Crinum asiaticum*' [WATS] : Jav.  
*bakung* : NgD.*bakong* 水生植物名 : Bug.Mks.*bakung* : ToB.*bahung* 灌木名) (図  
 2, 3)。

ただし, '*Aloe capitata*' は *sahondra* という名称で '*Aloe macroclade*' から区

14) 湯浅浩史博士の教唆による。

別されることもある [RICH; CABANIS *et al.* 1969: 374]。 *Crinum* はヒガンバナ科で東南アジア原産、 *Aloe* はユリ科でマダガスカルやアフリカ原産。 *Crinum* はインドネシアでポピュラーな園芸植物である。 *Crinum* は嘔吐剤や解毒用に、 *Aloe* は胃腸障害に葉の汁を飲むほか、虫刺され防止に肌につける。

なお、 *vahona* を '*Heritiera littoralis*' サキシマスオウノキ (アオギリ科) とみるような [CABANIS *et al.* 1969: 334] 誤用例も報告されている。

- 12) \**bangkuwang* '*Pandanus* sp.' タコノキ属 (タコノキ科) の一種 > *vakoana* ~ *vakoa* '*Pandanus utilis*' ビョウタコノキ [DESH; RAJE] (: *Mal.měngkuang* '*Pandadus atrocarpus* オオタコノキ and other spp.' [WATS; WILK]: NgD. *bangkuang*: Tgl. *bangkuwang-bundok* '*Pandanus dubius*' [DEMP]) (写真 3, 4)。

ビョウタコノキはマダガスカル原産であるが、気根の繊維が帽子、葉が屋根葺きで使用されるのは、オオタコノキの用途と共通する。ただしフィリピンで Tgl. *bangkuwang* ~ *bangkuwang* は '*Scirpus crossus* [sic]' (*Scirpus grossus*) カヤツリグサ科を意味する [PANG]。この植物は、現在、Mal. では *rumput*

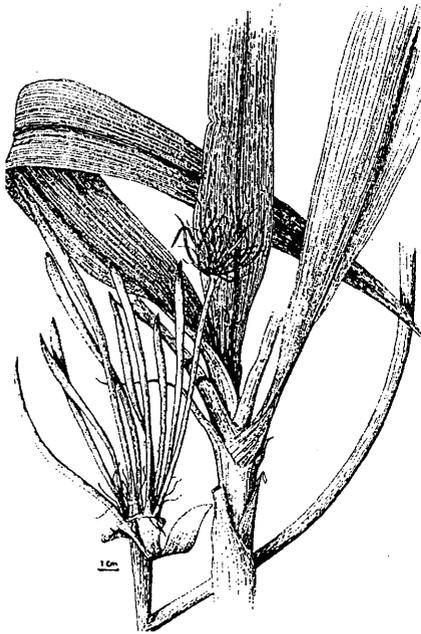


図2 *Crinum asiaticum* [LBN 11]  
(原図は Jitno Rijadi による)



図3 *Aloe capitata* (古い植物画集から)

murung と呼ばれる。いずれもこれを材料に敷物や籠が作られるので、ここに意味変化の契機を見出すことができよう。なお、タコノキの総称は 34) 参照。

Dempwolff はこの祖語形から Mal.běngkuang : Jav.běngkowang も由来したとみるが、これらは '*Pachyrrhizus angulatus*' [WATS], '*Pachyrrhizus erosus*' クズイモ (マメ科) [LBN 7] を意味する。クズイモは 17 世紀、アメリカから各地に広まった植物である。Mal.běngkuang は mēngkuang と通時的には姉妹語 (doublets) 関係になるが、後者は前者の前鼻音化形によって派生した語で、共時的に意味は無関係である。

- 13) \*ba[r]ji 調理したコメ > vary '*Oryza sativa*' イネ, 稲粳 [RICH] (: NgD.bari 調理したコメ : Bug.bari 干し飯)。

Dempwolff によって、不確定とみなされた \*ba[r]ji の [r] は、Bug. の例によって r に指定しうる。なお、南部スラウェシ諸語サッドントラジャ語の barri' ~barri 「赤米」も同族語 (cognate) である可能性がある。なお、31) 参照。

- 14) \*biRaq '*Alocasia spp.*' クワズイモ属 (サトイモ科) [BLUS IV] > viha ~ via<sup>15)</sup> '*Typhonodorum lindleyanum*' ティフォノドルム (サトイモ科) [RICH; CABA; DESH; RAJE] (: Mal.birah '*Alocasia indica*' [WATS], '*Alocasia spp.*' [WILK] :



写真3 *Pandanus atrocarpus*  
(インドネシア・バリ島)



写真4 *Pandanus utilis*  
(大阪市・咲くやこの花館)



写真5 *Alocasia* spp.  
(ミクロネシア・ポーンペイ島)



写真6 *Typhonodorum lindleyanum*  
(アンタナリヴ)

NgD.biha : Mks.ToB.bira : Tgl.  
biga? '*Alocasia macrorrhiza*'  
[CONS] (写真5, 6)。

なおマダガスカルでサトイ  
モにたいする総称 saonjo~son-  
jo '*Colocasia antiquorum*' [RICH;  
CABA; DESH] は、イエメンの  
sandj [ABE 1984: 94], クリオ  
ールの sonje [MALZ] という語  
と音的にもっとも近い。

- 15) \*ciyum 嗅ぐ > Bts.tsio-ntsi-  
ona~tsiona '*Emilia amplexi-  
caulis*' [RICH], Btl. '*Emilia  
citrina*' ベニニガナの一種 (キ  
ク科) [CABA; DESH] (: Mal.

15) PANからの \*R>z という音韻変化よりも、中間的な NgD. の -h- を語源とすることによつて、viha~via への変化がより合理的に説明できる。

cium 嗅ぐ, 匂う : Jav.ciyum : NgD.sium : Bug.ciung)。

‘*Emilia amplexicaulis*’ はコンジロームに, ‘*Emilia citrina*’ はカイセン薬 (20 参照) の添加剤として用いられる。Mal. で ‘*Emilia citrina*’ は kētumbit jantan [WATS] と呼ばれ, 煎じて咳止めにされる。しかし, 「嗅ぐ」から意味変化する理由は不明である。

- 16) \*cuka 酢 > Bar.Skl.tsoha ‘*Citrus sp.*’ 柑橘類, tsoho ‘*Citrus aurantifolia*’ ライム (ミカン科) [CABA] (: Mal.cuka 醗酵したヤシ酒, 酢 : Jav.coka-k : Bkp.cuka : Bgs.Mdr.cukka : Tgl.suka? すっぱい果実, 酢)。

この語は原インドネシア語の段階で借用されたサンスクリット語 *cukra*-「果実の酢」を語源とし, マダガスカルにはインドネシア経由ではいった例である。ただし, マダガスカルでは地方語にのみ残る。Mrn. では voa-sary [RICH; MALZ; CABA] といい (sary の語源は不明), 柑橘類の種名には voa-sary を複合語の要素とする語が多い。なお, tsoha のスワヒリ語 chungwa 語源説 [RICH] はとることができない。

- 17) \*[dD]aqan 枝 > ranga ‘A hard-wooded tree; *Ochna sp.* オクナ科の一種’ [RICH] (: Mal.dahan 枝 : NgD.Bkp.dan)。

これは, マダガスカルにおいて意味が特殊化した例である。

- 18) \*[dD]aven 葉 > ravina (: NgD.Bkp.dawen 葉 : Mny.Dsn.raßen)。

ravina を複合語の要素として, マダガスカル原産の ravina-la (< \*alas 森) ‘*Ravenala madagascariensis*’ タビビトノキ (バショウ科) [RICH; CABA; RABE] にたいする呼び名がこのように造語された。ただし, ベツィミサラカ族の場合は 35) 参照。

見掛けの \*dahun (> Mal.daun 葉 : OJav.Jav.ron : Bug.Mks.raung) 語源説をとるのは [MARRE 1883: 108]。ただし PAN の \*[dD]aven と \*dahun は姉妹語で, さらに古い共通の PAN 形 (\*[dD]aSwen) の存在をすることもできる。そうであるにせよ, マダガスカルの形は南部カリマンタンの諸言語の形を直接継承していることが明らかである。

- 19) \*[dD]uRi 刺 > roy 有刺灌木 (: Mal.ToB.Bug.duri 刺 : OJav.rwi : Jav.ri : NgD.Bkp.duhi)。

ただし, roy のみで *Mimosa latispinosa* オジギソウ (ミモザ) の一種 (マメ科) を意味するような特殊化した用法もある [CABA]。

- 20) \*garunggang ‘*Cratoxylon spp.*’ クラトキシロン類 (オトギリソウ科) > Mrn.

harongana : Bts.haronga '*Haronga madagascariensis*' [RICH; MALZ; CABA; DESH; RABE] (: Mal.gëronggang~gëronggang '*Aglaiia griffithii* ジュランの一種 (センダン科) ; *Cratoxylon* spp.' [WATS], '*Cratoxylon fromosum*' [WILK], '*Cratoxylon arborescens*' [LBN 14] : NgD.garunggang : ToB.garunggang 樹木名) (図4, 5)。

マダガスカルで固有種名となった harongana は gëronggang と同じ Hypericaceae (=Guttiferae) オトギリソウ科に属する。しかし, harongana は灌木であり, gëronggang は高木である点がとくに異なる。ダヤク諸族は gëronggang を屋根葺き材として使用する。ただし, gëronggang, haronga はともに, 葉や樹皮の液がカイセン薬とされる点に共通の用途が見出される。また, harongana の若葉は濃栗色染料としても使用される。

Adelaar はこの語が四音節で植物名だから借用語だとみているが



図4 *Cratoxylon arborescens* [LBN 14]  
(原図は Ischak による)



図5 *Haronga madagascariensis*  
[提供: 湯浅浩史]  
(原図は Vesque による)

[ADELAAR 1989: 16], これらはかならずしも借用語の絶対的条件とはならない。

- 21) \*kun[D]ur ‘Benincasa’ トウガン (ウリ科) > Prov.hondro カボチャ [RICH] (: Mal.kundur ‘Benincasa cerifera’ トウガン [WATS] : Bug.Mks.kunruluk : ToB.gundur : Tgl.kundol)。

トウガンはジャワ原産の一年生ツル植物である。この語にはマダガスカルにおいて比喩的に姉妹語が発生し, Mrn.akondro ‘Musa sapientum’ バナナ [DESH], ‘Musa paradisiaca’ リョウリバナナ [RABE] がうまれた。なお, 直系の 35) 参照。トウガンとバナナとのあいだに意味的推移を起すうえでどのような契機があったのか不明であるが, このような意味変化が起り得るならば, PAN \*pisang バナナ [DEMP] (> Mal.pisang ‘Musa sapientum’ [WATS]) を日本語ヒサ・ゴ (=ヒョウタン) の語源とみる説 [村山 1981: 157-159] も可能なことになる<sup>16)</sup>。

- 22) \*kunj ‘Curcuma spp.’ ウコン類 (ショウガ科) [BLUS IV] ~ \*kunjij ‘Curcuma viridiflora’ [VERH] > Bts.honitra [RICH] (: Mal.kunyit ‘Curcuma’ domestica’ ウコン [WATS] : OJav.Jav.kunir : Bug.unnyi : Mak.kunik : ToB.hunik)。

インドネシアにおけるウコンの用途は広い。民間薬はもとより調理, 染色, 呪術にも使用される。またハレの席での共食に供される, ウコンをいれて炊いた「黄飯」(Mal.nasi kuning) がある。ウコンにたいする民間信仰は, インド文化の一環としてインドネシアに輸入されたものである。インド文化以前には, 赤色がハレの色とされた。マダガスカルでハレの日には赤飯が炊かれるのは, インドネシアの古い習慣を残すものである。マダガスカルでは, ウコンは 45) のようにジャワ語とのみ共通する点が注目される。\*kunj 系はベツィミサラカ族に残るのみであり, またその対象も, 赤色染料をとるためのツル植物 (植物名称不明) に限定されている。

- 23) \*lenga ‘Sesamum indicum’ ゴマ > lingo-za ~ longo-za ~ longo-zy ‘Aframomum angustifolium’ アフラモムム的一种 (ショウガ科) [FLACOURT 1658: 128; CABA; DESH] (: Mal.lēnga ‘Sesamum indicum’ [WATS; WILK] : OJav.Jav.lēnga : NgD.lengo : Bug.langa : Mks.langnga : ToB.longa : Tgl.linga)。

マダガスカルで longo-za の葉はスプーンの代用にされることがある。

\*lenga はオセアニアの諸言語 (Fij.re-rega : Sam.lega など) で ‘Curcuma

16) ヒサゴの語源にはこれまで定説がない。湯浅説では「久・子」だという。

*domestica*’ に意味変化する。実際の植物は存在せずとも、ゴマとウコンがともに呪術的に使用されたことに意味変化の契機を見出すことができる [SAKIYAMA 1987: 47-48]。

- 24) \*lumut コケ, 藻, 水草 > lomotra ~ lombotra ‘Algae 藻類; *Vaucheria sessilis* フシナシミドロの一種’ [RICH], ‘*Spirogyra*’ アオミドロ [CABA; RABE] (: Mal. lumut コケ, 藻, 水草 [WATS; WILK] : OJav. Jav. lumut : NgD. lomot : Bug. Mks. lumuk : Mdr. lumi q : ToB. limut : Tgl. lumot)。

lomotra は、通称 *algue verte* ‘Chlorophyceae’ 緑藻類と呼ばれる水コケの一種で、ねぶとの治癒に用いられる [DESH]。

なお、lomotra hazo (=木の藻) は ‘*Usnea* sp.’ サルオガセ類 (サルオガセ科) [DESH] をさす。

- 25) \*mangga ‘*Mangifera indica*’ マンゴー > manga マンゴー (: Mal. mangga ‘*Mangifera feotica*; *Mangifera indica*’ [WATS] : ToB. Tgl. mangga)。

複合語として Prov. tsi-manga ‘*Ipomoea batatas*’ (=マンゴーモドキ) サツマイモ、manga-hazo (=木のマンゴー) キャッサバなどのように意味変化する。

Dempwolff がこの形を再構成しているためここに引用するが、マンゴーがマダガスカルへもたらされたのは、1802年以前にインド・アラブ商人によるといわれるから [CABANIS *et al.* 1970: 948], manga は原オーストロネシア語と直接的関係をもたない。

- 26) \*medang ‘Lauraceae’ クスノキ科 [WATS] > merana ‘*Vernonia merana*’ ヨモギボク科の一種 (キク科) [RICH; MALZ; PERR], ‘*Brachyloena [sic] ramiflora*’ (*Brachylaena*) キク科 [CABA] (: Mal. mēdang : NgD. madang : ToB. modang : Tgl. marang ‘*Artocarpus* パンノキ属 (クワ科) ; *Litsea* ハマビワ属 (クスノキ科)’ [DEMP])。

インドネシアで mēdang に含まれる種類は多いが、大部分がクスノキ科に属し、芳香のある樹皮と淡白色の葉裏をもつのが特色である。ジャワでは民間薬としてもっとも多用される植物のひとつであるが、カリマンタンでは木が堅いため家屋の柱とされる。マダガスカルでは叢林から離れて生えるため、hazo-tokana 「孤独木」ともいわれ、葉は煎じて虫下しにされる。また、この木を家のなかにもち込むと壺が割れると信じられている。

- 27) \*nanas パイナップル > ma-nanasy パイナップル [CABA] (: Jav. Mal. nanas)。

Dempwolff がこの形を再構成しているためここに引用するが、パイナップ

ルは15世紀以降、ブラジルから広がったもので、語源もブラジルの現地語とされる。マダガスカルには [FLACOURT 1658: 119] に *ananas* の記載がある。したがって、年代的にインドネシアからの移民によって導入された可能性はうすく、Grandidier の推定はただしくない [CABANIS *et al.* 1970: 993]。mananasy はポルトガル語 *ananas* の借用語とみなすのが妥当であり、Jav.Mal.nanas との直接的関係はない。

- 28) \*niyuR ~ \*niuR [VERH; BLUS IV] ‘*Cocos nucifera*’ ココヤシ(ヤシ科) > nio (: Mal.nyiur ‘*Cocos nucifera*’ [WATS; WILK]: OJav.nyu : NgD.enyoh : Bkp.enyuh : Mny.niui : Tgl.niyog)。

ただし nio は (\*buhaq >) voa-nio ~ voa-niho ~ voha-nio という複合形でのみ使用される。ココヤシは hazo-voanio (=ココヤシの木) ともいわれ、ココヤシの実 (coco) は voan’ny voanio といわれる。

voa-nio の民間語源として Flacourt [1658: 127] の伝えるアンタヌシ族の民話によれば、もともとマダガスカルの南部地方にはココヤシがまったく生えていなかった。ある日海岸に打ち上げられたココヤシの実が、20~30年かかって立派な木に成長した。この木を見に海岸へ行った王は、木の下でうたた寝をしてしまった。おりしも熟した実が王の頭に落下し、王は死んでしまった。だからココヤシのことを、voa「撃たれた」-ni「によって」-io「それ」というのである。なお、voa は「実」の voa と同音異義である。

- 29) \*nunuk ‘*Ficus benjamina*’ ベンジャミンツリー (クワ科) etc. (PAN) [SAKI], (PMP)[BLUS II; VERH] > nunue [FLAC]: Mrn.ma-noko ~ nonoka : Skl.nonoky ‘*Ficus melleri*’ [RICH; PERR; DESH], ‘*Ficus pyrifolia*’ [CABA; RABE] (: Snr.Ngd.nunu : BoM.Tr.r.nunuk ‘*Ficus benjamina*’: Cmr.nunu ‘*Ficus prolixa*’ ガジュマル (榕樹) (クワ科) : Tgl.nuno2 祖先)。

この語はインドネシア語派中央部の \*ba[r]ingin 系 ‘*Ficus spp.*’ イチジク属 (クワ科) (> Mal.bëringin ‘*Ficus benjamina*; *Ficus acamptophylla*; *Ficus microstoma*; *Ficus pisifera*’ [WATS]: OJav.Jav.waringin : Snd.ca-ringin : Bal.baingin : NgD.baringin : Bug.waringin : ToB.baringin) の周りに分布する。西ジャワの Snd. にも ca-ringin があるが、同じく Snd. の nunuk (樹木名) が中央部に残る唯一の同族語の痕跡であるとすれば、中央部に現れた \*ba[r]ingin によって \*nunuk は周辺部に追いやられたことになる。ただし、\*ba[r]ingin は、OJav. から諸言語に借用されていった可能性もある。たとえば、Mal. で bëringin は、

jawi-jawi ともいわれる。インドネシアではベンジャミンツリーに祖霊が宿るとみなす民間信仰が遍在するが、インド起源であろう。Tgl.の意味変化はそのような契機によって起った [崎山 1982: 16-18]。マダガスカルでは民間薬として nonoka の葉を煎じ、赤痢の薬とする。なお 46) 参照。

- 30) \*nya[t]uq~\*nyatuq [VERH; BLUS IV] ‘Sapotaceae アカテツ科; *Palaquium* spp. ガタバチャ類 (アカテツ科)’ > voa-nato [FLACOURT 1658: 121]~nato, ‘*Imbricaria madagascariensis*’ [FLAC; MALZ; RAJE], ‘*Labramia bojeri*’ [PERR] (: Mal. nyatuh ‘Sapotaceae generally’ [WATS], ‘*Palaquium* spp.’ [LBN 3]: NgD.nyato ゴムノキ: Mks.nato 樹木名: Tgl.nato ‘*Sterculia*’ ピンボンノキ属 (アオギリ科) [DEMP])。

*Imbricaria* は樹皮から赤色染料を採り、*Palaquium* は接着剤となる樹液 (guttapercha) を採る。Flacourt の記述では、木が建築材とされるほか、実がそのまま、あるいはミルクや蜂蜜とともに食べられる [FLACOURT 1658: 121]。

なお Cabanis には、nato を vintanina と区別せず、*Calophyllum inophyllum* (3 参照) とみるような混乱がみられる [CABANIS *et al.* 1969: 279]。

- 31) \*pajay ‘*Oryza sativa*’ イネ > fary ‘*Saccharum officinarum*’ サトウキビ (イネ科) [FLACOURT 1658: 120; CABA] (: Mal.padi ‘*Oryza sativa*’ [WATS]: NgD.parei: Bkp.parei: Snd.pare: ToB.pa-l-ge)。

fary を複合語の要素とする名称は多い。すべてイネに類推して造語されたもので tsi-mpari-fary (=イネモドキ) ‘*Echinochloa crus-galli*’ イヌビエ (イネ科) [RICH], ‘*Echinochloa colonum*’ インドヒエ (イネ科) [CABA], fari-na-omby (=ウシのイネ) ‘*Saccharum* sp.’ サトウキビ類 [DESH], fari-maty (=枯れたイネ) ‘*Clematis mauritiana*’ クレマティス (ウマノアシガタ科) [RICH; RABE], fari-maso (=目のイネ) ‘*Plectranthus madagascariensis*’ ヤマハッカの一種 (シソ科) [DESH], fari-hazo (=木のイネ) ヤシ科の一種 [RICH] などがある。ただし、fari-sate~fari-saty 灌木名 [FLACOURT 1658: 140] の現在の植物名称は不明である。

13) の vary がこの \*pajay に由来するとみる説 [MARRE 1883: 116; RICH; ARAKIN 1963: 17; 馬淵 1974: 591] は、音韻変化的に成立しない。また、vary を PAN \*beRas 「米粒」の音位転換形に由来するとみる説 [DAHL 1951: 322-323] も不自然である。なお Adelaar [1989: 26] 参照。

- 32) \*paku ‘*Diplazium* and *Athyrium* spp. メンダ類 (ウラボシ科)’ [VERH] ~\*pah(e)ku ‘*Athyrium esculentum*’ [BLUS N] > Mrn.faho~voa-faho : Bts.vofaho ‘*Cycascircinalis*’ ジャワソテツ (ソテツ科) [RICH], ‘*Cycas thouarsii*’ ソテツの一種 [CABA] (: Mal.paku シダ類 (総称) [WATS] : OJav.Jav.Bkp.Bug.Mks.Mdr : paku : ToB.pahu : Tgl.pako? ‘*Athyrium esculentum*’ [CONS])。

複合語として tsi-paho (=シダモドキ) は ‘*Asplenium* (sensu stricto)’ (Aspleniaceae) チャセンシダ科をさす [DESH]。

- 33) \*p(al)apaq 葉の中央脈 > Mrn.falafa バナナの葉の中央脈, Bts. ヤシ科の一種 [RICH] (: Mal.pělēpah 葉の中央脈 : Jav.papah : NgD.Bkp.palapah : Bug.palapa : Tgl.palapa?)

Dempwolff は祖語形に「植物の材料」という意味を与えるが、不適當であろう。諸言語の意味的対応からみて、籠に編んだり、ささらのように束ねてほうきにしたり、葉のもっとも有効利用し得る部分名称とみるほうがよい。

- 34) \*paNDan ‘*Pandanaceae*’ タコノキ科 > Prov.fandrana ‘*Pandanus* sp.’ [RICH] (: Mal. ‘*Pandanus* spp.’ : OJav.Jav.pandan : NgD.ToB.pandan : Bug.Mks.pandang : Tgl.pandan)。

マダガスカルで fandrana は、幹は水導管、葉は屋根葺きに利用される ‘*Pandanus* sp.’ タコノキの一種をさす。

- 35) \*pun[t]i ~\*punti [BLUS N] ‘*Musaceae*’ バショウ科 > fontsy~ontsy [FLA-COURT 1658: 119] : Skl.ontsy : Btl.otsy ‘*Musa sapientum*’ リョウリバナナ (バショウ科) [RICH], ‘*Musa paradisiaca*’ [CABA]。

この原オーストロネシア語形はオセアニアでは広く分布をするにもかかわらず、これを継承するインドネシア語派の言語は知られていない。インドネシア語派中央部であらたに発生した \*pisang が \*pun[t]i を周辺に追いやったことになる。

なお、Bts.fontsy~ontsy [RICH; CABANIS *et al.* 1970: 474] はタビビトノキを意味する。タビビトノキは別名オウギバショウと呼ばれるように、バナナと同じバショウ科に属する。18) 参照。

- 36) \*putat ‘*Barringtonia* spp.’ サガリバナ属 (サガリバナ科) > Bts.fotatra ‘*Butonica apiculata*’ [RICH], Skl.fota-be ‘*Barringtonia butonica*’ ゴバンノアシ [CABA] (: Mal.putat ‘*Barringtonia* spp.’ [WATS] : NgD.putat (樹液が石鹼の代用になる樹木、植物名称不明))。

ただし、*Btl.fotatra* がアメリカ原産の '*Lantana camara*' シチヘンゲ (クマツヅラ科) [CABANIS *et al.* 1970: 788], '*Hibiscus diversifolius*' ハマボウ (ハイビスカス) の一種 (アオイ科) [RABE] などを意味することがある。このような変化への契機は不明であるが、たんに同音異義である可能性も否定できない。

オーストロネシア語族では '*Barringtonia speciosa (asiatica)*' ゴバンノアシは \**butun* '*Barringtonia spp.*' (PMP) [BLUS IV], \**butu*[n~ng] [SAKI] (> Jav.Mal. *butun* : NgD.*butun* : Mks.*butung* : Tgl.*botong* : Cmr.*puteng* : Fij.*vutu* : Sam. *futu*) を継承するのが一般的である。しかし、マダガスカルにこの形は伝わらない。ゴバンノアシはオーストロネシア民族によって、魚毒植物として利用されることが多いが、マダガスカルでそのような用途は報告されていない。ただし、サカラヴァ族では *laro* というトウダイグサ科の一種 (*Euphorbia*) を魚毒植物にすることが知られている [RUUD 1960: 71-72]。

- 37) \**qampelas* '*Tetracera indica*' ヤスリバカズラ (ビワモドキ科), '*Ficus wassa*' [VERH]>*ampaly* '*Ficus sorocooides*' イチジク属 (クワ科) [RICH; DESH] (: Mal. *ĕmpelas* 'Scabrid leaves plants, chiefly Dilleniaceae' ビワモドキ科 [WATS] : Jav. *r-ĕmpelas* : NgD. *hampelas* ~ *t-ampelas* : Bug. *ampellek* : Mks. *ampallasak*)。

インドネシア、マダガスカルともにその樹皮をやすりとして使用する。

- 38) \*(q)aRa '*Ficus variegata* クビナガイチジク (クワ科) and other spp. イチジク属 (クワ科)' (PMP) [VERH] ~ \**qaRa*l '*Ficus spp.*' [BLUS IV] > *ara*<sup>17)</sup> ~ *vo-ara* '*Ficus sp.*' [RICH], '*Ficus trichophlebia*' [PERR], '*Ficus cocculifolia*' [RABE] (: Mal. *ara* '*Ficus spp.*' [WATS] : OJav. *Snd.ara* : Ngd. *ɽara* : Snr. *aha*)。

- 39) \**rami* 樹液植物 (PAN) [SAKI] > *Skl.Bts.ramy* ~ *a-ramy* '*Canarium madagascariensis*' マダガスカルカンラン (カンラン科) [CABA; DESH; RAJE] (: Mal. *rami* ~ *ramin* '*Alchornea villosa*' オオバベニガシワ (トウダイグサ科); *Abroma augusta* (アオギリ科); *Ficus chartacea* シラボシイチジク (クワ科)' [WATS], '*Boehmeria nivea*' ラミー (苧麻) (イラクサ科) [WILK] : Jav. *rami*)。

マダガスカルで *ramy* は樹液から雌黄 (*gamboge*) を採り、カヌーの防水用に使用されるほか、儀礼に際し香として焚いたり、呪符に塗ったりする。いっぽう *rami* ~ *ramin* はいろいろの種類の樹木を含むが、もとは樹液をとり得

17) ただし、PAN \**R*>*Mrn.z* という音韻変化の例外となる [DEMPWOLFF 1937: 89]。あるいは基層言語 (マドゥラ語) からの借用語か [DAHL 1977: 95]。

る植物を総称したものと考えられる。したがって、\*rami ‘*Boehmeria nivea*’ [Blus IV] のように祖語の意味を限定することは不可能である<sup>18)</sup>。

- 40) \*rumbi[y]a ‘*Metroxylon* sp.’ サゴヤシ類 (ヤシ科) ~\*rampia [BLUST 1977: 28]~\*Rambia~\*Rumbia ‘sago palm’ [Blus IV]>rofia~rafia~raofia ‘*Sagus ruffia*’ [RICH; MALZ], ‘*Raphia ruffia*’ ラフィアヤシ (ヤシ科) [CABA; RABE] (: Mal.rumbia~rëmbia ‘*Metroxylon sagus*; *Metroxylon rumphii*’ [WATS; WILK]: NgD.hambie : Bkp.hambie : Bug.rumpia : Mks.ToB.rumbia) (写真 7, 8)。

マダガスカルにサゴヤシは生育しない。外形的にはサゴヤシによく似たマダガスカル原産のラフィアヤシに類推が行われたのは妥当であった。ただしラフィアヤシから澱粉はとれないが、葉の中央脈や繊維が縄や敷物などに有効利用される点でサゴヤシと共通する。ラフィアヤシは、マダガスカルでもっともポピュラーな有用植物で、メリナ族のことわざでも「ラフィア糸に絹糸をつぐな (=木に竹をつぐ)」「*Aza manao foly mena tohizan-drofia.*」といわれる。なお、42) 参照。

- 41) \*rumpu 草>rompotra キャッサバの葉 (: Mal.Mal.ToB.rumpu 草)。



写真 7 *Metroxylon* sp.  
(インドネシア・ジャバブラ近郊)



写真 8 *Raphia ruffia*  
(東部マダガスカル古写真)

18) 湯浅博士によれば、*Abroma augusta*, *Alchornea villosa* はともに繊維植物で、*Ficus* も気根や樹皮の繊維が利用されるので、共通項は繊維を利用し得る植物で樹液の利用は二次的なものであろう。

キャッサバがアメリカ大陸から広まったのは18世紀とされる。マダガスカルでキャッサバは *manga-hazo* (=木のマンゴー) というが、スワヒリ語 *muhogo* を借用した *mohogo* も用いられる。

- 42) \**sa*(ng)*gu* サゴ澱粉 > Prov.sako : Skl.tsako~tsako-tsako ‘*Zea mays*’ トウモロコシ [RICH; CABA] (: Mal.Jav.ToB.sagu サゴ澱粉 : NgD.Tgl.sago)。

マダガスカルにサゴヤシやサゴ澱粉は知られない。ただし、トウモロコシがアメリカ大陸から広がったのは16世紀以降である。マダガスカルには18世紀かそれ以前に広まった [CABANIS *et al.* 1970: 905]。しかし、それまでこの語がなにをさしていたのかは不明である。

- 43) \**tabu* 水汲み, あか汲み > tavo~voa-tavo ‘*Cucurbita pepo*’ セイヨウカボチャ (ウリ科) [RICH], ‘*Cucurbita maxima*’ クリカボチャ (ウリ科) [DESH; RABE] (: OJav.Jav.tawu 水汲む : ToB.tabu カボチャ : Tgl.taboʔ ヤシ殻製柄杓)。

*voa-tavo* のサンスクリット語 *atabu* [sic] 語源説 [RICH] には誤解がある<sup>19)</sup>。

- 44) \**teleng* > *tolongo*~*voa-tolongo* ‘*Citrus medica*’ ブシュカン (ミカン科) [CABA] (: Mal.tēlang~talang ‘*Ervatamia corymbosa*’ サンユウカ的一种 (キョウチクトウ科) : Jav.tēlēng 淡青色の花 (植物名称不明) : ToB.tolong ‘*Carex* spp.’ スゲ属 (カヤツリグサ科))。

Dempwolff は「植物名」とだけ意味を与えているが (ただし, Mrn. の例はあげられていない), 言語間の意味的隔たりが大きく再構形の意味を与えがた例である。音形の偶然の一致ということも考えられる。

- 45) \**temu* ‘*Curcuma* spp.’ ウコン類 (ショウガ科) > *tamo-tamo* ‘*Curcuma longa*’ ウコン [RICH; MALZ; DESH; RABE; RAJE]。

ジャワでは *kunir* ‘*Curcuma domestica*’ ウコン (22参照) 以外の野生種は *tēmu* で区別され, *tēmu mangga* ‘*Curcuma mangga*’ マンゴーガジュツ, *tēmu irēng* ‘*Curcuma aeruginosa*’ ムラサキガジュツ, *tēmu kunci* ‘*Boesenbergia pandulata*’ オオパンガジュツ, *tēmu giring* ‘*Curcuma heyneana*’, *tēmu glēnyeh* ‘*Curcuma soloensis*’, *tēmu lawak* ‘*Curcuma xanthorrhiza*’, *tēmu putih* ‘*Curcuma zedoaria*, *tēmu putri* ‘*Curcuma petiolata*’, *tēmu tis* ‘*Curcuma purpurascens*’

19) *atabu* [RICH] には引用の誤り (あるいは誤植?) があり, ただし, サンスクリット語 *alabu*-‘*Lagenaria vulgaris*’ のユウガオ (ウリ科) のことであろう。熟果は水入れとして使用される。この語はインドネシアの諸言語に借用され, Mal.Jav. では *labu* が「カボチャ, ヒョウタン, トウガン」を意味する [GONDA 1973: 322]。Dempwolff も原オーストロネシア語における借用語として \**labu* を再構成し, \**tabu* とは語源の関係にない。

[LBN 7] などのような種類がある。

インドネシアでもマダガスカルでもウコンの根茎から黄色染料をとるほか、マダガスカルでは膿瘍への湿布、葉はマラリア熱の蒸気療法に使用される。

Jav.těmu だけがマダガスカルにみられることは、この植物の導入がもっとも遅く行われたことを意味する。

なお、tan-tamu [FLAC], ta-tamo, tamo-tamo が ‘*Nymphaea lotus*’ [RABE], ‘*Nymphaea stellata*’ ムラサキスイレン [CABA; DESH]をさすことがある。*Nymphaea* の根茎は、皮髻しや痔疾の治療に使用される。ムラサキスイレンはスイレン科に属し、ウコンのようにショウガ科ではないが、いずれも根茎が有効利用されるために意味的分化が起ったのであろう。

- 46) \*zabi ‘*Ficus spp.*’ イチジク属 (クワ科) > avi-avy ‘*Ficus sp.*’ [RICH], ‘*Ficus trichopoda*’ [DESH; RAJE], ‘*Ficus megapoda*’ [CABA; RABE], ‘*Ficus baroni*’ [CABA] (: Mal.jawi-jawi ‘*Ficus benjamina*’ ベンジャミンツリー [WATS], ‘*Ficus rhododendrifolia*’ [WILK] : Mks.jawi-jawi : ToB.jabi-jabi)。

avi-avy の樹液は鳥もちとして使用される。(29), (37), (38) もイチジク属に属するが、このような用途の相違に基づいて名称が区別されたのであろう。

## VIII. マダガスカル語の形成

II章でも述べたように、現在のマダガスカルにおける諸言語相互間の相違は比較的小さい。それは、17世紀以降から始まったイメリナ王国による国土統一に起因すると考えられる。イメリナ王国を建てたメリナ族は、インドネシアからの最後の移民として14世紀までにマダガスカル北東部に上陸したあと、15世紀ごろにはヴェジンバ族の住んでいた中央高地に進出し [LABATUT et RAHARINARIVONIRINA 1969: 79], 16世紀ごろから各地に割拠していた小王国を吸収しつつ、18世紀末にはほぼ国土の大半を支配するにいたった。

メリナ族には、文化要素的にもジャワ的な側面が少なからずみとめられる [高谷他 1989: 451-454]。現在のマダガスカル語はメリナ語を母体としてできあがっているが、言語的にも明らかにジャワの用法を継承する部分がある。つぎにその顕著な例を示す。

1. 語彙

Ⅲ章で述べたように、Dempwolff の比較語彙において、メリナ語がジャワ語とのみ共有する語彙は非常に少なく、つぎの9項目しかない。

- 1) \*[h]abiq 「それぞれ」 > Jav.k-abeh : Mrn.avy
- 2) \*[h]aNDa 「上方」 > Jav.anda 「梯子」 : Mrn.andra
- 3) \*duRuq 「液体」 > Jav.du-duh 「果汁」 : Mrn.ro 「果汁, 肉汁」
- 4) \*[h]ela[r] 「羽毛」 > Jav.ĕlar 「鳥の羽」 : Mrn.elatra 「翼」<sup>20)</sup>
- 5) \*[h]iling 「注ぐ」 > Jav.iling : Mrn.idina
- 6) \*[h]intang 「星」 > Jav.l-intang : Mrn.k-intana
- 7) \*lamak 「マット」 > Jav.lemek 「裏打ち」 : Mrn.lamaka
- 8) \*li(m)pung 「槍」 > Jav.limpung : Mrn.lefona
- 9) \*nusa 「島」 > Jav.nusa : Mrn.nosy

ただし再構成にはいたらないが、このほかにもジャワ語と共通する語彙がある。

- 10) Jav.aling 「覆い」 : Mrn.alina 「夜」
- 11) Jav.lara 「病」 : Mrn.rary 「病む」
- 12) Jav.linu 「うずく痛み」 : Mrn.dilo 「歯・耳の刺激痛」
- 13) Jav.rina 「昼間」 : Mrn.raina 「朝」 : [FLAC] maraina<sup>21)</sup>
- 14) Jav.waja 「歯」 : Mrn.vazana 「八重歯」

なお、碑文にのみ残る古マレー語 [COEDÈS 1930]と対応する若干の例もある。

- 15) OMal.samvau : OJav.sambong 「舟の一種」 : Mrn.sambo 「汽船」
- 16) OMal.tapik 「軍隊」 : Mrn.tafika 「軍隊」

このように語彙面ではジャワ語からあまり影響がみられないのは、あとで述べるように注目すべき点である。しかし、メリナ語にはジャワ語に由来する特有の語法がみとめられる。そのひとつに独特の修辭法に基づく表現がある。

- 17) OJav.hayu-a 「良かれ, …して良かろうか」 > Jav.aja 「…(する)な」 : Mrn.aza 「…(する)な」<sup>22)</sup>

20) この再構形は Dahl によって \*elaj と修正された [DAHL 1951: 71-71]。

21) Mny.raai 「日の光」を raina の語源とみる説 [DAHL 1951: 325] は不適當である。このように原オーストロネシア語がマダガスカル言語において二重母音化する場合がある。たとえば, PAN \*tulang 骨 > Mrn.tolana : Bts. (南部) tolanga : taholen [FLAC] : Atd.Bar.taola : Bts.taolang, PAN \*rumbi[y]a 'Metroxylon sp.' サゴヤシ類 > rofia ~ rafia ~ raofia 'Raphia ruffia' ラフィアヤシ (Ⅶ章40参照)。

22) メリナ語の aza は Mny. の禁止語 ada と音韻的に対応しない。したがって, Dahl のマアニャン語語源説 [DAHL 1951: 192]は成立しない。

この例は、古ジャワ語 hayu 「良い」という形容詞に非現実を表すための接尾辞 -a が付いた語で、もともとは禁止を表すためのジャワ語的婉曲表現に由来する。

またこの -a はメリナ語では、命令形の接尾辞として使用される（ただし行為者重点文 (actor focus) において）。

- 18) OJav.cara 「方法」(←サンスクリット語 ācāra- 「作法」) : Mrn.tsára 「良い」, tsará (<tsára-a) 「良かれ」(アクセントの位置の移動に注意)。

## 2. 文法 (接辞法)

文法面では、このような接尾辞 -a が存在するほか、ジャワ語に特徴的な敬称の接頭辞 ra- (母音の前では r-) がメリナ語 ra- と対応する。ただし、メリナ語では ra- が人名に冠せられるのみならず、親族名称の普通名詞にも痕跡として ra- をともなって現れることがある。

19)	OJav.	Mrn.
	r-ānak 「子」	rana-, ただし rana-bavy 「兄弟から姉妹へ、男性から母・妻・娘以外の女性への呼称」, rana-dahy 「姉妹から兄弟へ、女性から父・夫・息子以外への呼称」という複合語として用いられる。(vavy~bavy 「女性」, lahy~dahy 「男性」)。
	rā-ka 「兄, 夫」	raha-, ただし raha-vavy 「妻方の姉妹」, raha-lahy 「夫方の兄弟」という複合語として用いられる。
	r-āri 「弟, 妹」	ra-zandry 「弟または妹への呼称」
	yayah 「父, 母」	r-azana 「祖先」, r-ay 「父」(r-ai-be 「祖父=大きい父」)

古ジャワ語 ra-ka は「姉」には用いられず、「姉」は「兄」を含む一般的呼称 kaka によって表わされる。また古ジャワ語の敬称をともなった ra-bi 「妻」はマダガスカルに見出されない。古ジャワ語 yayah は敬称を含まないが、マダガスカルでは敬称を付けた「祖先」「父」という姉妹語を発生させている。このような敬称を発生させたのは、「祖先によって生きる社会」(society of the ancestors) [BLOCK 1971: 37-72] と特徴づけられるように、とくに祖先崇拝を重んじる文化的側面と無関係ではない。

マダガスカルで「母」には古ジャワ語でなくカリマンタン系の語彙が保持される。すなわち NgD.inē : Mny.inēh : Dsn. inē<sup>l</sup> (<PAN \*ina) に由来する Mrn.r-eny 「母」(r-eni-be 「祖母=大きい母」) といわれるが、ここには古ジャワ語の敬称接頭辞 ra- をともなっている点が注目される。

さらにメリナ語では、接辞法において古ジャワ語で独特の音韻変化を行った接尾辞を直接、継承する場合がある。つぎの古ジャワ語の例 (wēlar-an-a) のなかの -an- は、後に非現実の -a をともなうとき、もともと場所を指示する接尾辞 -i が変化した不規則な交替形である。メリナ語の目的語重点文 (object focus) の -in- と場所・受益者重点文 (location-beneficiary focus) の -an- [KUROKAWA 1985: 256] は、それぞれ、古ジャワ語の受動形の接尾辞 -ĕn- とこの変則的な -an- を語源としていることが明らかである。なお、場所・受益者重点文の命令形は、-a でなく -o が用いられるが、これは古ジャワ語と対応せず、マダガスカルにおける二次的発生にかかわる。つぎの例の祖語形は PAN \*belaj である。

20)	OJav.	Mrn.
	wēlar 「広げる」～melar	velatra 「広げる」～mamelatra
	wēlar-ĕn-a 「(ある場所に) 広げられよ」	velar-ina 「(なにかが) 広げられる」
	wēlar-an-a 「(ある場所に) 広げられる」	velar-ana 「(ある場所に) 広げられる」
	wēlar-a 「広げよ」	velar-o 「広げよ」

## おわりに

マダガスカルの言語形成を、以上に述べてきたような語彙的文法的現象に基づき、あらたに渡来した支配者の言語と土着の被支配者の言語という観点から分析するならば、最後の移民であるジャワ人は話し手の数では少数派であったが、それ以前から定住していた民族によってジャワ語がリングア・フランカ (交易用言語) として使用され始める。ただし、14世紀以前のジャワ語には、現在のジャワ語にみられるような組織的な敬語体系がまだ発達していなかったことも指摘しておきたい [崎山 1985: 50]。このようにいったんピジン化を始めたジャワ語は、ひき続いてクレオールとなり、現代のマダガスカル語へと継承されてゆく、という仮説が立てられよう。ジャワ語のピジン化には、Ⅲ章およびⅦ章で明らかにしたように、語彙的には南部カリマンタン諸語を基層言語とする影響を強く留めながら、Ⅷ章でみたように、文法的にはジャワ語法をかなり残すといった、これまでに知られている通常のピジン化のパターンをたどったことが認められる。すでに Solheim II もマダガスカル語の起源をリングア・フランカにあるとみている [Solheim II 1965: 35-36]。ただし Solheim II は、共通語となった言語を、仮に Dahl 説に従うならば、古マアニャン語かあるいはそれ

に近い言語である, と考えた。私の考えとは具体的に内容が異なるものの, ビジン化というプロセスをみとめようとした点では賛成できる。

## [略号表]

### マダガスカルの諸言語名

Atd : Antandroy	Atk : Antankarana	Atn : Antanosy	Bar : Bara
Btl : Betsileo	Bts : Betsimisaraka	Mrn : Merina	(Prov : Provincial)
Shn : Sihanaka	Skl : Sakalava	VeZ : Vezo	

### インドネシア・オセアニアのオーストロネシア諸言語名

Bal : Balinese	Bkp : Bakumpai	Bnt : Bontok	BoM : Bolaang-Mongondow
Bug : Bugis	Cmr : Chamorro	Dsn : Dusun	Fij : Fijian
Hnn : Hanunoo	Igf : Ifugao	Jav : Javanese	Mal : Malay
Mdr : Mandar	Mks : Makassar	Mny : Maanyan	NgD : Ngaju-Dayak
Ngd : Ngadha	OJav : Old Javanese	OMal : Old Malay	Pal : Palauan
Sam : Samoan	Snd : Sundanese	Snr : Sangirese	Tgl : Tagalog
ToB : Toba-Batak	Trr : Tiruray		

### オーストロネシア語族祖語名

PAN : Proto-Austronesian	PBRT : Proto-Barito	PEI : Proto-Eastern Indonesian
PMP : Proto-Malayo-Polynesian	PWMP : Proto-Western Malayo-Polynesian	

## 付 記

本論文は, 民博特別研究「アジア・太平洋における民族文化の比較研究」(研究代表・佐々木高明教授)の海外出張経費により1989年1~2月, および文部省在外研究員経費により1990年11~12月, マダガスカルおよびフランスで2回にわたり実施した現地調査と資料調査による研究成果の一部をなすものである。マダガスカルでは, アンタナナリヴ大学附属芸術・考古学博物館(1991年から文明学研究所を兼ねる)J. A. Rakotoarisoa 館長のご配慮により, メリナ, ベソィミサラカ, ヴェズ, 北部サカラヴァの各言語(方言)の現地調査を行うことができた。

本論文の内容は, 1991年6月15日京都大学アフリカ研究センター主催の第11回シンポジウム「アフリカの自然と文化」, 1991年7月6日民博共同研究会「台湾およびその周辺諸語における古層の言語学的・民族学的研究」(研究代表・松澤員子教授)で部分的に口頭発表をした。その際の質問者の方がた, 草稿全体を通読し有益なコメントを寄せられた民博の福井勝義助教授と石森秀三助教授, そしてⅦ章を読み細部にわたるご教唆をくださった財団法人・進化生物学研究所の湯浅浩史博士(民族植物学)に深く感謝したい。

文 献 ( [ ] は本論文の略称)

ABDUL MUTHALIB

1977 *Kamus Mandar-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.

ABE, Y.

1984 *Le riz et la riziculture à Madagascar*. Paris: Éditions du CNRS.

ADELAAR, K. A.

1989 Malay Influence on Malagasy: Linguistic and Culture-Historical Implications. *Oceanic Linguistics* 28 (1) : 1-46.

ARAKIN, V. D.

1963 *Mal'gashskii yaz'ik*. Moskva: Akademiya Nauk.

ARNDT, P.

1961 *Wörterbuch der Ngadhasprache*. Ende Flores: Arnoldus.

BELLWOOD, P.

1985 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. North Leyde: Academic Press Australia.

BEMANANJARA ZEFANIASY, R.

1985 Rice in Malagasy Oral Tradition. *East Asian Cultural Studies* XXIV (1-4) : 173-180.

BLOCK, M.

1971 *Placing the Dead*. London and New York: Seminar Press.

BLUST, R. A.

1977 Austronesian Culture History: Some Linguistic Inferences and Their Relations to the Archaeological Record. *NUSA: Linguistic Studies of Indonesian and Other Languages in Indonesia* 4: 25-37.

[BLUS I] BLUST, R. A.

1980 Austronesian Etymologies. *Oceanic Linguistics* 19(1-2) : 1-180.

[BLUS II] BLUST, R. A.

1983-84 Austronesian Etymologies II. *Oceanic Linguistics* 22-23 (1-2) : 29-149.

[BLUS III] BLUST, R. A.

1986 Austronesian Etymologies III. *Oceanic Linguistics* 25 (1-2) : 1-123.

[BLUS IV] BLUST, R. A.

1988 The Austronesian Homeland: A Linguistic Perspective. *Asian Perspectives* XXVI (1): 45-67.

BOCK, C.

1988(1881) *The Head-Hunters of Borneo*. Singapore: Graham Brash Ltd.

BURKILL, I. H.

1966(1935) *A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula I-II*. Kuala Lumpur: Ministry of Agriculture and Co-operative.

[CABA] CABANIS, Y., L. CHABOUIE et F. CHABOUIE

1969-70 *Végétaux et groupements végétaux de madagascar et des mascareignes*, tome 1-4. Tananarive: Bureau pour le développement de la production agricole.

CENSE, A. A.

1979 *Makassaars-Nederlands Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

COÈDES, G.

1930 Les inscriptions malaises de Çrivijaya. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 30: 29-80.

COOLSMA, S.

n.d. *Soendaneesch-Hollandsch Woordenboek*. Leiden: A. W. Sijthoff's Uitgeversmaatschappij.

- [CONS] CONSUELO, V. A. *et al.*  
1971 *Plants of the Philippines*. University of the Philippines.
- CORNER, E. J. H. and 渡辺清彦  
1969 『図説熱帯植物集成』東京：廣川書店。
- DAHL, O. C.  
1951 *Malgache et Maanjan. une comparaison linguistique*. Oslo: Egede Instituttet.  
1977 *Proto-Austronesian*. Lund: Studentlitteratur.  
1988 Bantu Substratum in Malagasy. *Études Ocean Indien* 9: 91-132.
- DECARY, R.  
1951 *Moeurs et coutumes des malgaches*. Paris: Payot.  
1964 *Contes et légendes du sud-ouest de Madagascar*. Paris: Éditions G. -P. Maisonneuve et Larose.
- [DEMP] DEMPWOLFF, O.  
1934-38 *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes I-III*. Berlin: Verlag von Dietrich Reimer.
- [DESH] DESCHEEMAERKER  
1986 *Ravi-Maitso*. Ambositra.
- DEZ, J.  
1963 Aperçus pour une dialectologie de la langue malgache. *Bulletin de Madagascar* 204: 441-51, 205: 507-20, 206: 581-607, 210: 973-94.
- DJANTERA KAWI  
1985 *Kamus Bakumpai-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- DUNNEBIER, W.  
1951 *Bolaang Mongondowsch-Nederlandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- DYEN, I.  
1953 Review of O. C. Dahl, *Malgache et Maanjan*. *Language* 29 (4) : 577-590.  
1971 Malagasy. In T. A. Sebeok (ed.), *Current Trends in Linguistics* 8: 211-239. The Hague-Paris: Mouton.
- ELLI, P. L.  
1988 *Dizionario bara-italiano*. Fianarantsoa: Ambozontany.
- FERRAND, M. G.  
1904 Madagascar et les îles Uaq-Uaq. *Journal Asiatique*, 10<sup>e</sup> sér.t. 3, pp. 489-509.
- FLACOURT, E. de  
1658 *Histoire de la grande île Madagascar*. Paris: Chez Pierre l'Amy.
- [FLAC] FLACOURT, E.de  
1658 *Dictionnaire de la langue de Madagascar*. (Revised by G. Ferrand and republished in 1905. Paris: Publications de l'École des Lettres d'Ager. Bulletin de Correspondance Africaine 33.)
- FREY, E.  
1989 *The Kris: Mystic Weapon of the Malay Magic*. Singapore: Oxford Univ. Press.
- 深沢秀夫  
1989 「稲作を生きる、稲と稲作の実践と戦略——北部マダガスカル Tsimihety 族に於ける稲作と協同労働——」『東南アジア研究』26 (4) : 394-416.
- GUEUNIER, N. J.  
1988 Dialectologie et lexicostatistique, cas du dialecte malgache de Mayotte (Comores). *Études Ocean Indien* 9: 143-170.
- GONDA, J.  
1973 *Sanskrit in Indonesia*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- HAMONIC, G.  
1987 *Le langage des dieux, cultes et pouvoirs pre-islamiques en pays bugis Celebes-Sud, Indonésie*. Paris: Éditions du CNRF.

- HARDELAND, A.  
1859 *Dajaksche-Deutsches Wörterbuch*. Amsterdam: Frederik Müller.
- HUDSON, A. B.  
1967 *The Barito Isolects of Borneo: A Classification Based on Comparative Reconstruction and Lexicostatistics*. Southeast Asia Program, Dept. of Asian Studies, Data Paper no. 68, Ithaca: Cornell Univ. Press.  
1972 *Padju Epat, The Ma'anyan of Indonesian Borneo*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- IDE SAID, M.  
1977 *Kamus Bugis-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- 井原徹山  
1944 『印度教』東京：大東出版社。
- 石毛直道・K. ラドル  
1990 『魚醬とナレズシの研究——モンスーン・アジアの食事文化——』東京：岩波書店。
- JANSZ, P.  
1932 *Praktisch Javaansch-Nederlandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage: G. C. T. van Dorp & Co.
- JOSEPHS, L. S.  
1990 *New Palauan-English Dictionary*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- KUROKAWA, H.  
1985 A Concise Description of the Basic Structure of the Malagasy Language. *Reitaku University Journal* 40: 233-275.
- LABATUT, F. et R. RAHARINARIVONIRINA  
1969 *Madagascar, étude historique*. Nathan-Madagascar.
- [Lamb] *Lamba Malagasy, Étoffes Traditionnelles Malgaches*  
1978 Antananarivo: Musée d'Art et d'Archéologie de l'Université de Madagascar.
- [LBN 3] Lembaga Biologi Nasional-LIPI  
1980 *Jenis-jenis Kayu Indonesia*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- [LBN 7] Lembaga Biologi Nasional-LIPI  
1980 *Ubi-ubian*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- [LBN 11] Lembaga Biologi Nasional-LIPI  
1980 *Tumbuhan Obat*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- [LBN 13] Lembaga Biologi Nasional-LIPI  
1980 *Palem Indonesia*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- [LBN 14] Lembaga Biologi Nasional-LIPI  
1980 *Kayu Indonesia*. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- 馬淵東一  
1974 「稲米語彙分布の説明」『馬淵東一著作集』東京：社会思想社。
- [MALZ] MALZAC, V.  
1987(1888) *Dictionnaire malgache-français*. Fianarantsoa.
- MARRE, A.  
1883 *Aperçu philologique sur les affinités de la langue malgache avec le javanais, le malais et les autres principaux idiomes de l'archipel Indien. Actes du 6<sup>e</sup> congrès internationales orientalistes tenu à Leyde en 1883, 4<sup>e</sup> partie, 5<sup>e</sup> section, pp. 57-214.*
- MATTHES, B. F.  
1874 *Boegineesch-Hollandsch Woordenboek*. Te 's-Gravenhage: Bij M. Nijhoff.
- MOLET, L.  
1979 *La conception malgache du monde, du surnaturel et de l'homme en Imerina*. Paris: Harmattan.
- 森島中良  
1972(1787?) 『紅毛雑話』(生活の古典双書6) 東京：八坂書房。
- 村山七郎

- 1981 『琉球語の秘密』東京：筑摩書房。  
中尾佐助  
1966 『栽培植物と農耕の起源』東京：岩波書店。  
大林太良  
1991 「広域間の移動——大語族の移動」岡・江上・井上編『民族の世界史Ⅰ民族とは何か』東京：山川出版社。  
大林太良・杉田繁治・秋道智彌（編）  
1990 『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究報告別冊11号）。
- OTTINO, P.  
1986 *L'étrangère intime, essai d'anthropologie de la civilisation de l'ancien Madagascar*, tome 1. Paris: Éditions des Archives Contemporaines.
- [PANG] PANGANIBAN, J. V.  
1973 *Diksyunaryo-Tesaurus Pilipino-Ingles*. Quezon: Manlapaz Publishing Co.
- [PERR] PERROT, E.  
1921 *Essai d'identification des bois tropicaux - les bois de Madagascar I-II*. Paris: Chez Larose.
- [RABE] RABESA, Z. A.  
1986 *Pharmacopée de l'alaotra*. Antananarivo.
- [RAJE] RAJEMISA RAOLISON  
1985 *Rakibolana Malagasy*. Fianarantsoa: Ambozontany.
- RAMIANDRASOA, F.  
1975 *Atlas historique du peuplement de Madagascar*. Antananarivo: Université de Madagascar.
- RASAMUEL, D.  
1984 Alimentation et techniques anciennes dans le sud malgache. *Études Ocean Indien* 4: 81-109.
- RAZAFINTSALAMA  
1928-29 *La langue malgaché et les origines malgaches I-II*. Tananarive: G. Pitot & Cie.
- [RICH] RICHARDSON, J.  
1967(1885) *A New Malagasy-English Dictionary*. Hants: Gregg International Publishers Ltd.
- RUUD, J.  
1970(1960) *Taboo, A Study of Malagasy Customs and Beliefs*. Tananarive: Trano Printy Loterana.
- SACHS, C.  
1938 *Les instruments de musique de Madagascar*. Paris: Institut d'Ethnologie.
- 崎山 理  
1982 「意味変化についての覚書」『民博通信』18: 14-19。  
1983 「ジャワ語の敬語の実態」『日本語学』2(1): 50-61。
- SAKIYAMA, O.  
1987 East-West Cultural Exchanges in the Western Carolines. In I. Ushijima and K. Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia* (Senri Ethnological Studies no. 21), pp. 43-51.
- シェーラー, H.  
1979 『ガジュ・ダヤク族の神観念』クネヒト・ベトロ, 寒川恒夫訳 東京：弘文堂。
- SCHLEGEL, S. A.  
1971 *Tiruray-English Lexicon*. Berkeley: University of California Press.
- SLAMETMULJANA  
1976 *A Story of Majapahit*. Singapore: Singapore Univ. Press.
- SOLHEIM II, W. G.  
1965 Indonesian Culture and Malagasy Origins. *Annales de l'Université de Madagascar*, Hors série, pp. 33-41.

- STELLER, K. G. F. en W. E. AEBERSOLD  
 1959 *Sangirees-Nederlands Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- 高橋澄子  
 1988 『ジャムゥー——インドネシアの伝統的治療薬——』東京：平河出版社。
- 高谷好一・前田成一・古川久雄・田中耕司・加藤剛・深沢秀夫  
 1989 座談会「マダガスカル農耕——そのマレー的要素について——」『東南アジア研究』26(4)：430-454。
- TAMMU, J. and H. van der VEEN  
 1972 *Kamus Toradja-Indonesia*. Rantepao: Jajasan Perguruan Kristen Toradja.
- 田中耕司  
 1989 「マダガスカルのイネと稲作」『東南アジア研究』26(4)：367-393。
- [VERH] VERHEIJEN, J. A. J.  
 1984 *Plant Names in Austronesian Linguistics. NUSA: Linguistic Studies of Indonesian and Other Languages in Indonesia* 20.
- VERIN, P.  
 1986 *Origines malgaches: histoire culturelle et archéologie de Madagascar, mise au point et commentaire*. In C. P. Kottak et al. (eds.), *Madagascar, Society and History*, Durham: Carolina Academic Press.
- VERIN, P., C. P. KOTTAK and P. GORLIN  
 1969 *The Glottochronology of Malagasy Speech Communities*. *Oceanic Linguistics* 8(1)：26-83.
- WARNECK, J.  
 1977 *Toba-Batak-Deutsches Wörterbuch*. Den Haag: Martinus Nijhoff.
- [WATS] WATSON, J. G.  
 1928 *Malayan Plant Names*. Singapore: Federated Malay States Government.
- [WILK] WILKINSON, R. J.  
 1932(1941?) *A Malay-English Dictionary*. Tokyo: Daitoa Syuppan Kabusiki Kaisya.
- WURM, S. A. and S. HATTORI  
 1981 *Language Atlas of the Pacific Area*. Canberra: The Australian Academy of the Humanities.
- 吉本 忍  
 1987 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12(2)：315-447。
- 全日本検数協会  
 1980 『新輸入原木図鑑』東京：全日本検数協会。
- ZOETMULDER, P. J.  
 1974 *Kalangwan, A Survey of Old Javanese Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- ZOETMULDER, P. J. in collaboration with S. O. ROBSON  
 1982 *Old Javanese-English Dictionary*. The Hague: Martinus Nijhoff.